

教育家となり、遂に帶刀を許され、後京都に往來し、新著を求め歸り、苟くも時勢に後れざるを期し、新思想を子弟に注入す、身強健にして篤學、風雲の志なきにあらざるも、寧ろ多數の風雲兒を作らんとし、一生を教育に委ね、其の園部高等小學を出でたる門下生實に一千一百一十一人、其の數の一一人なるも奇ならずや、翁は此の門下生の寫眞を、小學校の懸圖的に装置し、其の書齋に掲ぐ、軍人あり、官吏あり、商人あり、工業家あり、千態萬様、四壁に列りて燦然煥然たり、翁其の間に机を直き、終始子弟と語る如く、曰く『毎日書信絶えず之が何よりの樂みです』と。

昨春三月心臟を病み、遂に園部高等小學校長を辭す、其の後を受くるものは翁の養ふ所、則ち辭すと雖も猶辭せざるが如し、教育は人間最高の事業、敢て小學と大學の區別なし、唯嘗々たる教育家は幾年之に従事するも益なし、翁は則ち然らず、老ゆるも尙若きが如く、其の學と徳と一郷を風靡し樵夫車丁と雖も先生を知らざるなし、翁の家圖書堆積、長槍と齋口と弓とは客間に懸る、其の思想も以てトすべく、風采は此に掲ぐる所の如し、一水其の村を流れ、壁間清浦奎堂の書する『濯足清流』の扁額掲ぐ、翁は實に其の境遇なり、丹波船井郡船枝村は翁の誕生の地、而して今隠棲の地、山高く水長く、其の徳南風の薰するが如し。

(九十四)

前外務大臣加藤高明君



君本姓は服部、名古屋藩の小役人服部東一郎の次男として生れたが、叔母の家を繼いで加藤となり、明治七年始めて笈を負う

て東京に遊び、十四年に大學を卒業した。當時大學卒業生といへば、官尊時代の利き者として、官府の門を潜つて意氣揚々たる數には漏れず、君の同窓もそれく口を見附けて幅を利かしたが、君は獨り下宿屋に轉がつて、頗る氣焰が上らなかつたは腹に一物あつての事、やがて突然岩崎彌太郎を訪ねて何か頼んで來たが、程なく三菱の北海道小樽支店長となつて出かけた、支店長といふと、頗るよいやうだが、月給僅に四十圓、其の翌々年彌太郎が北海道を巡廻して、小樽の支店に往つ

てみると、君は一昨年始めて頼みに来た時と同じの薄織ない洋服を着て、一向頓着なく、忠實に働いてゐる、彌太郎殊の外感服し、早速携へたる金時計を土産の代りとして差出した、君曰く有りがたく頂戴するが、此破れ洋服では不釣合だから、暫らく御預り置き下さいと、彌太郎老人益感心してしまつた、此の一事は君が得意の外交術を應用したものが否かは別問題として、君の運はこの時に開かれたものである。

それから東京本店に引上げる、英國に留學させる、その洋行中に彌太郎が死んだが、臨終に際して君に宛てた一封の書を遺した、君は直に召び還される、歸つて見れば棚から牡丹餅、一封の中には豪富岩崎家の花婿といふ運命が潜んでゐた、それが君の爲には百萬の味方、大隈伯の外務大臣秘書官として、初めて官途に就いて以來、トン／＼拍子の榮達、遂に今の大隈と伊藤の連鎖を握る、有力なる政治家の一人となつたのである。

君と同窓で、同期に大學を出て、現在もまた未來も有力なる競争者たるは、井上伯の女婿たる都筑馨六君である、誠によい好敵手だが、都筑氏の獨逸的なるに反して、君の英國的なるのも亦得易からざる對照である、君外相の椅子を擲つて以來、東京日々新聞に楯籠つて居るが、一寸機運が廻らぬのでジレつたいであらう、併し何も急ぐには及ばぬ、面壁九年の覺悟が肝要だ。

(九十五) 文學博士内田銀藏君



學者に奇癖あるは、關に疵のあるやうなもので、其の物をして却て貴からしむ、文學博士内田銀藏君も亦奇癖に富むの人、併し人は視て奇癖となすも、君は極眞面目

で、極勉強家で、言はゞ學問といふ動物が生きてるやうなもの、其の人が奇癖に富むとて、君自身は少しも奇癖と思はぬ、何處までも眞面目である、斯う畫傳に入るも、君は迷惑する位であらう、君は東京の人、日本經濟史の専攻で、今は斯學のオーソリチーである、最近に廣島高等師範教授より京都文科大學教授に轉任した。

君が十八歳の時、早稻田専門學校を卒業して、今や高等中學に入らんとするとき、眞

面目に人に語りて曰く「僕は今日まで右と左の區別が確り分らぬ」と、而も早稲田は最優秀で卒業して居る、高等中學を経て大學に入る、其の間臆目も振らぬ勉強、然るに君の持つて居る懐中時計が屢次止まる、「僕の時計は狂つて仕方ない」と、時計屋に持つて行けば、龍頭の一捻ぢで時計はピチ／＼と動く、時計の悪るさにあらず、君の仕懸るのを忘れるのである、英國に留學して買つた洋燈は頗るお氣に入りて「世界中此の洋燈はど明るいものはない」とて、巴里にでも伯林にでも持參し、歸朝のときはブックと與に重要品として日本に來朝した、其の心を需めんとして、君は東京市中を探がした事がある、探しても／＼無いので、遙る／＼英國に注文する、螢や雪の代用をして、深夜君が勉學の伴侶をする洋燈を愛重するは寧ろ自然であらう、友人を訪ひ、少しく時間を空費すれば君は乃ち去る、友人之を留むれば君は容を改め「御互に勉強する時間を損するではないか」と。

斯んな工合で勉強と眞面目は君が特性である、少しも世の塵に染まぬ篤學の君子人で、一寸古人の或るものに肖た所がある、然ればこそ學問も造詣深く、前途測るべからざるものあれ、君は又與へられる權利を苟もせず、例へば議員選舉の時の如き、勉學に寸陰を惜むにも拘らず、必ず往いて一票を投じ、其の信するものを選擧す、是れ等も眞面目の證據で、政治に興味を持つといふにあらず、選舉權を有する以上は必ず投票せざるべからずと信するからである、敬すべきは學者、愛すべきは眞面目である。

(九十六) 板硝子製造の成功者島田孫市君

我が國も最近に至つてやつと文明の形式を揃へて來たが、つい此の間までは未だ我が國で出來ないものが随分あつた、板硝子



なども其の一つで、頗る需用が多いに拘らず、やつて見ると、誰れも彼れも皆な失敗に終つたのである、が彼は多年苦心慘澹の結果、到頭此困難なる板硝子製造に成功し、我が國は彼に依つて製造工業の一大進歩を來した。

彼は文久二年豊前中津に生れたが、十四の時東京に飛び出し、ある藥舖の丁稚小僧に住み込んだ、他日板硝子製造に成功する動機は實に此の時に與へられたので、彼れは此の藥舖に丁稚たる間に、多少應用化學の知識も出來た上、當時此の丁稚

小僧の日々手にする薬壇は、皆外國製のものばかりであつた所から、之を製造すれば儲かるに違ひない、又日本人が不廉なる外國のものを買ふ必要もなくなると、遂に硝子製造家たるべく志し、當時政府の經營して居た硝子製造品川工作分局の傳習生となつたのである、居る事四年、親しく英人スピート氏について專念習得する所あつたが、明治十六年始めて大阪に硝子製造會社起るに及び、雇はれて其の職工となり、爾來數年間一日も休んだ事なく、非常な精勵と忍耐とを以て、研究し經驗を積んだ結果、二十一年初めて獨立して小工場を起したのである、が元より小資本ではあり、隨分經營に困難したが、苦心の結果電燈のセードを初めて製造し、多少資本も出來た所から、益製造上に改善を加へ、二十二年始めて赤緑紫等の色硝子を製造して好結果を得、二十六年、我が國は初めて彼れに依つて製造されたる硝子を外國に輸出し、硝子製造業の一進歩を示したのであるが、事業に熱心なる彼れは尙之に満足せず、百尺竿頭更に一步を進め、皆人の出來ぬと云ふ板硝子製造に着手し、益田技師長と與に刻苦研鑽の結果、三十六年に至り原料も總て我が邦のもので完全なる板硝子を製造するに至つたのである。

三十五年國家に貢獻する所大なりとして藍綬褒章を賜はり、昨年十二月より更に事業の規模を擴め、盛にやつて居るが、苦心三十年間の効果空しからず、身を職工より起して今や我が國硝子製造の第一人と稱せらる、偉と云ふべし。

(九十七) 女流教育家棚橋絢子君



過般物故した奥村五百子は一代の女傑であつた、しかし女傑といふものが、凡て奥村

式でなくてはならぬとすれば、开は甚だしき誤見であらう、奥村式とは反對なる一面の女傑は棚橋絢子で、若し女性の本領が内を治むるにありとすれば、奥村式より、寧ろ棚橋式を取るが主當であらう。女史は大阪高麗橋酒造家牛尾田氏の長女、八九歳の時偶人の心學を講ずるを聞き、忽ち感じて學問に志し、經典餘師に出て晝夜講讀に餘念なかつたが、その父女史を誡めて曰く、女子の書を讀むもの、多く驕慢に走る、汝之を慎めと、依て女史は毎朝一家の未だ起きざるに先ちて起き、僕婢に伍して炊爨の業を執り、晝は専ら

家務と裁縫に従事し、其餘暇を以て眼を畫に晒らした、十六歳、奥野小山の門に入て

教を受けたが、當時小山の友人に、二本松藩士棚橋大作といふ人あり、旭莊門下の秀才として、詩文に長じたが、勉學の爲に明を失ひ、日ごろ小山に語て言ふ、予は韓愈の所謂唯目に盲するもので、心に盲するものではない、願くば予に代つて書を読みべき程の良妻を得て、我が志を成したと、女史はこの話を小山よりききて、自ら進んで其の配を希ふたが、子故に迷ふ兩親は、その盲人なるを悲しみて快諾しない、女史即ち父母の膝下に跪いて曰く、凡そ夫を撰ぶは賢不肖に在つて、盲と不盲とは敢て避くる所に非ずと、兩親も女史の決心金石の如くなるに感じて遂に之を許し、こゝに女史は盲儒棚橋松村氏の配となつたのである、時に年十七、十七の小女にかゝる健氣な決心ありとは、今のハイカラ娘の思ひも附かぬことである、之より女史は夫に伴はれて美濃に歸り、空山寂寥の裡、日夕夫に仕へ、又其の讀書生となり、幾回の家變に遭遇して、辛酸具に嘗め、貧苦の中より三人の幼兒を教養し、或は名古屋金華女學校の教員となり、或は桃天女學校に教鞭を執り、東京女子師範學校の創設に際して四等訓導となり、始めて居を東京に移し、後學習院女學校の教員となり、又金澤小學校を創立し、或は成立學舎女子部の校長となり、三十五年芝三田に私立高等女學校を起して、自ら其校長となつて、今日に至つたのである。

女史は儒教の教育を受け、又儒家の妻として、今日の令名を得たのである、隨つて其の道德主義は東洋流である、今の式部連からみれば、頑固とか、舊いとかいふに相違ない、しかし、こかくに批難のある現今の女流教育家の中で、舊いと言はれ、頑固といはるゝ此老女史の倫理學の講義は、最も生徒を服せしむるに足るとは世の定評である、尙此の傳を補ふに、女史が自ら自己を他人に擬して演説したといふ面白き物語りを別欄に掲ぐ。

(九十八) 歸化商人吳錦堂君

吳錦堂といへば、誰も知る我が邦で成功した支那人である、彼れは神戸で廣大なる商業を營み、且鐘淵紡績會社の大株主兼取締役として、我が實業界一方の雄である、彼れの財産は今三百萬圓と稱されて居るが、二十二年前の彼れを知るものは、不思議の感に打たれざるを得ない、彼れが始めて日本に渡つたは明治十七年、大なる一箇の風呂敷包に茶碗、燗寸、蝙蝠傘、花簪、凡そ日本人の日用品として、珍しく且安價なもの、一切を收め、雨つても照つても、毎日々々長崎市中を行商して居た一個



の貧乏商人である、彼れが志を立て郷里寧波を出立した時は彼れの懐中には僅に千

圓の外はなかつた、その千圓も全部自身のものではない、彼れの所持金は僅々二百圓、幸ひに彼れの將來に望を囑した友人が、一人は五百圓、一人は三百圓を投資し、茲に三名の組合は成り立ち、彼は只最少出資者の身を以てその實行者となつたのである、彼れは最も機敏な商人である、彼れがかく毎日行商する間に、その觀察眼に映じたのは、舶來摸造の安價の和製品が、我が國人の間に要求せらるることであつた、彼れは直に多くの和製品を仕入れ、神戸に來り、大阪に入り、日夜都鄙を駆け廻つたが、見込は違はず果して奇利を博した、かくして彼れは奮闘を以て唯一の樂とし、刻苦を以て却て其の心を慰め、以て十年間に最初の資本を百六十倍して、十六萬圓の利益を占めた、こゝに於て彼れは出資の割合に準じて利益を分配し、組合を解いて獨立の身と爲り、神戸に帖生號といふ商會を起し、又燐寸製造組合を起し、益奮闘して遂に今日の地位を致したのである。

彼れは吝嗇漢であるとは、往々聞く所である、這是縦合厘毛の小と雖も、濫りに支出せざる彼れの性行に見て、かくは言ふのであらう、乍併、這是彼れに限らず、凡そ赤手にして産を爲すものは、皆此の特色がある、彼が事を決して爲さんとするや、殆ど乾坤一擲の概がある、殊に日露戰爭に當つて數萬圓の義捐を爲したに見ても、其の一斑はわかるであらう、彼れは一般の支那人の如く忘恩背義の徒ではない、彼れは、その立身に顧みて、今や日本の歸化人である。

(九十九) 眞正の蠻カラ―芳野世經君

明治の今日、其の頭の上に麗々と天保時代の遺物を保存する、凡人が見たら恐らく狂



人としか思ふまい、が彼れは決して狂人でない、彼れは却て今日の人々が、形式丈はイヤに文明がりつつ、心は獸の如く、あらゆる不道徳を犯すものを見て、狂人と思つて居るだらう、又彼れはチヨン鬚頭だからと云つて、決して偏屈固陋ではない、彼れは却て今のハイカラ―連中が、女の腐つたやうな、くだらぬ事で争ふものを見て、偏屈固陋だと笑つて居やう。彼れがチヨン鬚を残して居るのを見、いかにも奇を衒ふやうに見えるが、彼れ

決して故らに奇を衒ふやうな下品な人物でない、彼れが第一期の國會に代議士となつ

た時、選舉民が國會議員にチヨン掬は餘りをかしいから切つてはどうかと勸めたが、切つてもよいが今更ら切ると却て奇を街ふやうであると、遂に其のまゝとなつたのである、だから彼のチヨン掬は奇を好まぬから残つて居るので、もし奇を好んだなら維新の時に逸早く散髪したに違ひない、是れでも其の人物は大概想像が出来やう、彼は安政三博士の一人芳野金陵の第三子、二兄天して彼れ即ち嗣となつたのであるが、幼時から父の逢源堂塾に學びて、儒學に精しく、金陵歿後一時昌平塾の助教となり、維新後は矢張逢源堂塾を開いて子弟を誘掖して居たが、明治十二年初めて府會の開かれた時、強て選ばれて府會議員となり、次で議長となり、市制が施かれた時には亦直に市參事會員となり、東京市府公共の爲に盡くした事は非常なもので、頭こそチヨン掬だが、世人から理想的名譽職と云はれて居た、星亨が市會に出てから全く一切の公共事業を止めて了つたのは惜むべしである、今日こそ代議士と聞くと、何だか一種厭ふべき聯想が起るが、第一期時代は選舉民も墮落せず、競ふて第一流の人物を選舉したもので、彼れ亦其の時選舉民の請を容れて、已むなく代議士となつた。

其の手入せぬチヨン掬頭、其大きな光つた眼つきを見ると、いかにも頑固でオツかないやうであるが、見かけによらぬとは全く此の事で、其の人に接すると實に申々如天々如として、いかにも君子とはコシな人を云ふのかと思はれる、もしハイカラーに對して鐵カラーと云ふ事が出来るならば、恐らく此れ程の鐵カラーはあるまい、書傳子は嘗て新渡戸博士を眞正のハイカラーと云つたが、今は亦此の筆法を以て彼は眞正の鐵カラーであること云ひたい、ハイカラーと云ひ、鐵カラーと云ふも、其眞正なる者に至つては即ち相距る一步のみ、書傳子は世人に對つて鐵ハイ何れとするも、只其眞正ならんを望む。

(百) 日下開山常陸山谷右衛門

常陸山谷右衛門、重量三十八貫六百々、體の重みは三十八貫六百々、だが相撲界に於ける彼の人物は、千萬鈞の重みがある、



に於ける古今卓絶の勇士である、試みに彼が土俵外の戦ひ振を見よ、現今の相撲界を

單に力量といふだけなら、駒ヶ嶽あり、太刀山あり、國見山あり、大砲あり、伎倆といふだけなら、兩國あり、荒岩あり、玉椿あり、逆鋒あり、多士濟々、決して人に乏しからず、然れども此等は何れも土俵の上の勇士である、彼の當面の敵たる梅ヶ谷、彼れは力量伎倆共に熱達したる相撲道の勇士として迎へられてゐる、而も此の勇士も亦土俵上の勇士には漏れぬ、常陸山は摩利志天の再來といはるゝ程の名人、土俵の勇士たるは言はずもがな、彼は土俵外に於ても、亦相撲界

両分して、其一を保つのが年寄雷、他の一を保つのが横綱常陸山、土俵外の交渉關係は、常に此の二
 勢力に因つて爲されてゐる、若し一人と一人、一騎打ちをしたらば、老來動もすれば元氣衰へんとす
 る雷は、到底常陸山の敵に非ず、されど雷も亦さる者、潜かに勢力の蘊蓄に努むるが故に、其の根は
 案外に堅い、この二勢力の角逐の結果は、毎年兩度の大場所番附となつて顯れて來る、若し此の番附
 發表を、内閣更迭の號外とすれば、雷は山縣で、常陸は伊藤である。
 常陸山は水戸藩の弓術師範役市毛右衛門の長男、幼より膂力強く、廢藩の後、其の父が小杉山の下
 で運送業を開いた時、常陸山十五六歳、こゝに通ひ來る多くの仲仕が力競べする毎に、一人も常陸山
 に勝つものがない、時々俯むげに寝て、味噌桶を脊に積み重ねさせ、その儘起上つて力自慢をしたこ
 ともある、その後水戸中學の三年生で退いて、慶應義塾に入學の目的で出京し、當時警視廳の擊劍
 師範たりし内藤といふ伯父の家に寄宿し時々伯父に擊劍の稽古をして貰つたが、伯父も竹刀を落さ
 れることが度々あつた、遂に伯父が力士になつたらと言ひ出し、自分も元より好める道相談整うて、
 出羽の海の部屋に入つてよりこゝに十餘年、遂に日の下開山、横綱御免の常陸山となつたのである。
 見よ、彼れが酒氣を負うて、土俵に入り、敵を睨んで仕切を爲す時、天下は彼れの眼中にない、その
 一たび起つや、乾坤一擲の壯圖を試む、梅ヶ谷の如き萬全の策なしと雖も、瓦となつて全うせんより
 は、玉となつて碎けよといふ彼の意氣は、實に日本男兒の花ではないか、而も天下無雙、こゝ數年、
 恐らく彼れ玉とはなるが、碎けるの時機は來まい、常陸山は實に相撲界の快男兒である。
 三十八貫六百匁、こゝに人物畫傳の文鏡として置く、畫傳子が掲げ來りし百人百傳、浮世の風に容易
 く散るものではない。

人物畫傳終

兩分して、其一を保つのが年寄雷、他の一を保つのが横綱常陸山、土俵外の交渉關係は、常に此の二
 勢力に因つて爲されてゐる、若し一人と一人、一騎打ちをしたらば、老來動もすれば元氣衰へんことす
 る雷は、到底常陸山の敵に非ず、されど雷も亦さる者、潜かに勢力の蘊蓄に努むるが故に、其の根は
 案外に堅い、この二勢力の角逐の結果は、毎年兩度の大塲所番附となつて顯れて來る、若し此の番附
 發表を、内閣更迭の號外とすれば、雷は山縣で、常陸は伊藤である。
 常陸山は水戸藩の侍衛師範役市毛右衛門の長男、幼より臂力強く、廢藩の後、其の父が小杉山の下
 で運送業を開いた時、常陸山十五六歳、ここに通ひ來る多くの仲仕が力競べする毎に、一人も常陸山
 に勝つものがない、時々俯むげに寝て、味噌桶を背に積み重ねさせ、その儘起上つて力自慢をしたこ
 ともある、その後水戸中學の三年生で退いて、慶應義塾に入學の目的で出京し、當時警視廳の擊劍
 師範たりし内藤といふ伯父の家に寄宿し時々伯父に擊劍の稽古をして貰つたが、伯父も竹刀を落さ
 れることが度々あつた、遂に伯父が力士になつたらと言ひ出し、自分も元より好める道相談整うて、
 出羽の海の部屋に入つてよりここに十餘年、遂に日の下開山、横綱御免の常陸山となつたのである。
 見よ、彼れが酒氣を負うて、土俵に入り、敵を睨んで仕切を爲す時、天下は彼れの眼中にない、その
 一たび起つや、乾坤一擲の壯圖を試む、梅ヶ谷の如き萬全の策なしと雖も、瓦となつて全うせんより
 は、玉となつて碎けよといふ彼の意氣は、實に日本男兒の花ではないか、而も天下無雙、こゝ数年、
 恐らく彼れ玉とはなるが、碎けるの時機は來まい、常陸山は實に相撲界の快男兒である。
 三十八貫六百匁、こゝに人物畫傳の文鎮として置く、畫傳子が掲げ來りし百人百傳、浮世の風に容易
 く散るものではない。

人物畫傳終

畫傳餘錄

獨帝の平生

○獨帝は早起の人なり、天尚暗く大抵の人は未だ床を離れざる時に早や起出で、數分間鐵啞鈴もて運動し、夫より髭を剃らしめて後、陸軍大將の制服に着換らる、總て八時となりて朝餐に就き、皇后手づから立て給ひたる珈琲を進めらる、朝餐は英國風にて牛酪つけたる卷麵包と冷肉のみなり。

○食後帝は書齋に入りたまふ、室内に數箇の印字機ありて各秘書官之を操り、帝が室内を歩行しながら、解り易き様短かき句切りにて、口授したまふ辭句を寫し取る、書翰に對する回答、請願に對する指令など、立所に取り捌かれ、裁決流るゝが如し、故に帝が口授して書かしたまふ書狀の數

は、一年間に八千通に上ると云ふ、之を終りて帝は侍臣の上つる、内外新聞紙の切抜を御覽あり、時としては鉛筆もて何か記入せらるゝことあり、而して後其の係りの役所へ下げらる、帝は國務上の書類にも同じく鉛筆を以て屢々記入せらる。

○帝は電話にて話す事を好ませらる、諸大臣は晝夜の別なく、何時帝より御通話の呼鈴に接するやも知れず。

○九時と十時の間に、帝は御一人にて、或は皇后御同伴にて、伯林の有名なる公園チールガルチンに馬車を驅り、又は散歩せらる、其御歩調極めて快速なり、帝は公園より直に宰相の邸に臨まれ、國務を協議せらる。

○宰相邸より還宮ありたる後は、宮内大臣を召して帝室の事務を協議決定せらる、次に文武の閣員

より来る諸報告を受けらる。

○斯く時間を定めて課程を嚴守せらるゝが故に、日々多くの事務を滞りなく爲し遂げたまふなり、大臣を召したまふには所を擇びたまはず、必要の際には停車場に於てすら引見せらる、又御旅行中にも御希望のまにまに何人をも引見したまふ、甚だしきは練兵場にて謁見を賜ふことすらあり。

○帝は獨逸帝國議會の議事に至大の注意を拂はせらる、其の伯林に在らせらるゝ時も、ボンダムに在らせらるゝ時も、或は帝國内何れの地に往かるゝも、議會の特別報告は常に帝の許に送らる、普魯西議會の議事も伯林市會の議事も矢張同様なり。

○午後二時晝餐を召さる、皿數も少く、決して三十分より長びくことなし、食後の日課は臨機に定めらるゝ午後は少くも二時間書齋に入りたまへど、

光榮に於て決して第二等にあらざると、又海軍の新兵に對する獨逸三色旗の説明に、黒色は勤勉勞作を意味し、白色は光榮と休息を意味し、赤色は汝等の祖先が勇戦して流したる愛國の血を意味す」と詔へり。

○獨帝の髭はカイゼル髭とて名高く、天に向つて逆立ちする状態の意氣であるが、此の髭は初めより然うでなく、一八九四年よりの事にて、宮中の理髮師ハビーといふ者が發明し、甚く皇帝の御氣に入り、爾來此の髭を特有としハビーは御旅行に必ず隨伴す。

○夜は種々に御一家樂しく過さる、帝は音樂にも堪能にして、中低音の美音を有せらるれども、餘り其の技を演じたまはず、洋琴の妙手たる皇后の演奏を傾聴するを樂しみとせらる、帝は又普通の

時には臨時用事に妨げられたまふことあり、書見終りて後は御乗馬にて外國大使を訪問し、又は美術家の仕事場を見舞はる、斯くて全く氣樂なる一市民の身となりたまふは五時以後なり、晚餐は晝餐よりも長時間にして、常に客を招きて食卓を共にせらる、帝は軟らかなる物別けて野菜を好みたまふ、帝の御嗜好の一は、春砕きたる馬鈴薯をあらへる獨逸風のビーフステーキなり、食卓の獻立は通常肉汁、魚肉、獸肉、野菜及び乾酪より成る、葡萄酒はライン或はモーゼルよりせるもの、レットナルなき瓶の栓抜きたる儘を供せらる。

○獨帝の演説に妙を得給ふ事は人の知る所にて、時に諧謔を交へ、或は奇想を吐き給ふ事少からず、其の一例に或る時歩兵第二聯隊にての御演説に、『兵士よ此聯隊は第二聯隊なれども汝等は名譽と

獨逸人と同じく、スカットと稱する骨牌遊びを好まると、帝の書籍又は新聞雜誌に對せらるゝや、大聲に朗讀し、讀み終りて後、一座の人々其の記事に就て議論を闘はすを例とせらる、兩陛下の大殿籠りは、通常十時乃至十一時の間にして、若し觀劇其の他特殊の祝宴等にて、夜を更されたる時は、勿論此の限りにあらず。(終)

田尻博士言行

○博士の人格は人物畫傳に收めたる如くなるが、其の言行、奇警超達、誠に餘師あり、左に其の一斑を録すべし。

○博士の勤務は既に世人の熟知する所なるが、其の家に在るとき讀書に熱心なるは、同家の止宿せ

る學生等が試験前に於て、殊更に勉強すると同様の勉強振りにて、爲に學生も勵まされて勉強すといふ。

○平素同家に寄留する學生、少き時は五六人、多き時は十名位にして、食事其他の生計振は一般中流社會と異なる所なし、只家内に些の階級なくして、主人も學生も下女も同一室にて同一の食物を喫し、食後は學生を相手に往々テニス等の遊戯的運動をなす事あり、去れど専修學校の終了が日々夜八時を過ぐるより、此等の運動は土曜又は日曜日に限らる。

○博士は敢て自用車又は抱へ車夫を有するにあらず、必要の場合には居室の附近に辻待ちせる車夫中、特に其老年者を選び、田尻家の印入袴纏を纏はしめ之に乗ることあり、之に就き博士語るらく、

ビシヤと遣つて來、風の吹く日に帽子の吹き飛ばされんとする時は、帽子のリボンを外して、腦天より脛に結びつけ、ノコノコ遣つて來られる所は、丸で土方同様で、其の平常の時も、色褪めたフロツクコートに靴を掲げられる所、宛然八卦見の風である、而も尙博士の博士たるを失はぬのだ。○學校での夕食は蕎麥二杯に限る、鉛筆と竹箸とは如何なる時にても（勿論講座にても）、博士洋服の上着の右胸の小ポケットに縦に三本差である、博士帰宅すれば直に外套を脱いで、其の上に羽織を着るのが普通、大抵の客は其の儘面會。○博士のテント主義に曰く、帝國大學の建築は如何にも贅澤だ、學校なんかは何んな建築でもよろしい、テント張でも結構です、専修學校も平屋建築なんかは餘程贅澤過ぎます、此の間も（四年間臺

若年の車夫は、自己の勤勉にて幾多欲する丈の客を誘引することを得て、其の收入を増加するを得べきも、老年の車夫は世人に嫌はれ其の收入も至て僅少なり、去れば己が時間の許す限りに於て老年の車夫を慰み、之に乗り呉るなりと。

○博士の乗車主義は斯の如くなるが、其れとても博士は容易に車に乗らず、有名の徒步家なれば、例の徒步會の連中が博士を戴いて會長とせんごじたるも、博士は之を斷り、或る場合には車に乗つた方が經濟且便利なりと答へし奇談もあり、或る人専修學校に通ひ、卒業まで三年間中、博士の車にて出勤せしは只の一度にて、其の時は天皇陛下を新橋まで御見送り申上げ、授業時間の切迫せしまゝ直に出校せしなりと。

○雨の降る日は、古編蝠傘に長靴を穿き、ビシヤ灣協會學校の建ちし當時）太郎冠者（桂伯の事）がやつて來て、我輩に經濟の講座（同協會の）を開いて呉れと頼むから、馬鹿云つちよる、おいどんは眞ッ平ちやと云ふと、太郎冠者が興醒顔して、なでんぢやすかと云ふから、おまさんは、そげん學校建てゝ官吏のみを養成する心算か知らんが、一體臺灣に幾人の官吏が要るのです、年々學校から出る學生を皆んな臺灣にやれば、臺灣は官吏で一杯になりますッぞ、また二百人や三百人の官吏を養成するに、そげん學校建つる必要ありますか、校舎が要れば我輩の専修學校を貸して上げよ、天下の政を執る者は、チと何も蚊も考へんと國民が困難しますッぞ。

○博士の辨當は竹の皮包の握り飯に極つて居る、博士曰く竹の皮の極上等一枚の價が五厘、之に握

飯を包むと、飯の乾き鹽梅がよくつて、皮にひつ附いた飯粒も、一粒々々箸で起して喫べる事が出来て、半粒の廢たりも出来ぬ、喫べた跡の皮は、之を圓めて持ち歸れば、餘程手軽で、嵩が低くて荷にならぬ、持つて歸つて一夜水に浸けて置く、皮が柔かになつて、翌日は包むに餘程便利だ、而して一枚の皮は極上手に使ふと、半月乃至一箇月は持てる、此れ程重寶で經濟に叶ふ者は少い。

○博士と故駒井重格氏との交りは一と通りではなかつた、這是米國留學時代に起因するので、即ち留學の當時は田尻氏は貧困で、駒井氏の助援を受けた事が非常に多かつた、處が田尻氏は駒井氏より一年先きに歸朝して官途に就き、重く用ひられた、其の後駒井氏も歸朝したが、地位は何時でも田尻氏の下である、去れど田尻氏は駒井氏を非常

に徳として、何にかに就けて恩義を返さんとして居た、例へば英米に新刊本があつて、夫れが博士の手に入ると、其の書物を半から割いて、半部を駒井氏に送り、氏をして新説に後れざらしむべく心懸けた、此の様の例が餘程多い。

○博士一名悪口博士の名がある、何故なれば博士は大隈伯を何時もちんばと呼び、伊藤侯を梳と云ひ、小手豊をせむし、奥田義人を偽人、岩谷松平を眞ツびら、角田眞平を恥をかく田と讀み、又曰く天野爲之の親父は餘程偉い人で、子を知るは親に如くなし、天野の親父は爲之の馬鹿なるを知つて、名前をつけた、即ち爲之はためゆきと讀むにあらず、之れをだめにすと讀むのだと。

咫尺して決算を奏上し、桂内閣を驚かした、翌日桂總理は柴田翰長をして叱言を申込みたるも斷然勿ね附け、桂に顔を洗つて出て來いと云へ。

○曾てエール大學より鳩山、伊藤侯、田尻外一名に、名譽博士號を送り來りし時、博士は曰くおいらんは芋武士で、博士號なんかは要らないから斷つたと。

○儘か四五年前であつた、博士一日病氣にて床に就き、爲に大學の講義を休まんとして、缺勤届を出した、處が書生の不注意で、其届が大學に届かない事が講義時間間に發見された、其處で博士は自分の休講の爲に、多くの學生が徒らに一時間を空費するの學生の失望を思ひ遣つて、やを病床を起き出で、藥瓶と玉子を携へて急ぎ登校し、漸く講義を濟せたこの事である。

○検査院よりの歸りは、講義の爲専修學校に寄校する、其の時刻は夕食時であるが、大抵は蕎麥二杯が普通なるも、時には狀袋にビスケット二十粒許りを携帶し、夫れにて腹を拵へる事もある。

○事の用は足せば足ると云ふのが主義で、學年又は卒業の試験問題を幹事に示すが如きも、別に之が爲に六ヶ敷形式を踏まぬ、有合した反古狀袋の端に、試験問題を書記して、幹事宛に持してよこした事もあると。

○博士は是れ迄紳士連の宴會は勿論、學校の卒業式又は同窓會等の宴席等にも臨んだ事はない、處が三十六年専修學校の卒業式の宴會の當時、學生の多くは博士の出席を望んで已まず、之が爲其交渉の任に當る者が、わざと暴風雨の夜陰を選んで、博士の宅を襲ふた、博士は平生の如く讀書に耽り

つゝも「今夜の様な晩に何しに來た」と、そこで交渉委員は其の次第を述べたら、博士決諾、好しければ明日は出ます。

○三十六年専修學校卒業式舉行の席上、博士餞別の辭をなして曰く、余は諸君に爲す丈の事はなしたり、諸君も學ぶ丈の事は學びたる筈、最早今日茲に改めて申上る事はない、只諸君は是から世に出やうと云ふのでありますから、今迄修得し得たる力を運用すれば宜しいのです、世は只實力です、之を料理に喩ふれば諸君の實力は刺身です、されど刺身許りでは喰へぬ、之に山葵を加味せなければ刺身の味が出ぬ、其山葵は諸君が心して得なければならぬと。

○法制局の參事官又青年經濟學者として比較的人に知らるゝ小林丑三郎氏も、博士に懸つては九切

○博士或る時の諧謔に曰く、松方が物知り貌に能く出しやばるが、彼れは頭の格好が悪いので、何が解りませう、併し知る事は多少は知つちよつても、彼れが知には、やまいだれが附きましてなア、痴ですよ、澁澤榮一は千手觀音で榮百ですよ。

○佛國武官某、一日博士の許を訪ね、東京市の道路悪しきを非難し、殊に雨天の日はぬかるみにて船が欲しいと、博士曰く勿論ですア、日本は島國で道も何にも要らぬ、總て交通は船でするのですもの。

○釜は飯を焚き、鍋は汁を煮る道具と、世の中の事はちやんと器械が備はつてある、夫れに政府の奴は鍋で飯を焚き釜で汁を煮て、馬鹿の有りつたけを盡すから、マア骨が折れますよ。

○やれ豫算が何うちやの、外債が何うちやのと、

り小供扱ひなり、一日博士所用ありて法制局に出て、コック／＼廊下を歩き廻つて、丑は居らぬか、丑は何處に居る、丑は居んかと、其の聲高くして流石の丑先生も遂に我慢し切れず、丑は此處に居りますよと、後で小林氏は田尻さんも少しは塙所柄を考へて呉ればよいにと。

○博士の著「財政と金融」の發行人某、博士の許に原稿料を持参して其の受納を乞ふ、博士曰く己れは前から云ふ通り、本を書いて原稿料などは取らぬ、己れの説を讀んで呉れるものがあれば、結構なのだ、併し御前は其んなに受取つて欲しいのなら、おいごんが善か事を教へて遣る、議員の奴等はな、一向に物の分らん奴等が多いで、お前はおいごんに遣る金で、衆議員の議員に一部宛寄送してやれと。

議員の奴等もぎやア／＼と上へ許り騒いで、眞實こゝと云ふ處を忘却して居るから、誠に情けない、政府の奴も何時もながら不經濟な事許りやるから、我が輩が武内宿禰の帽子を冠つて、グット眠んでやると、縮み上つちよるよ。

○博士嘗て松崎博士、小林學士と共に箱根の福住に遊んだ事がある、散々御馳走を食つていざ勘定となつた曉、博士は代物を支拂つた上に、五十錢の銀貨一つを投げ出して女中に與へた、女中は自分への下され物だらうが、御聲もかゝらず、さりとて茶代としては餘りに少額だから、少々まごつて、兎に角茶代として五十錢の受取書を出した、處が博士怪訝な顔して、おい何うしたのかい、五十錢全部呉れて遣るのぢやないぞ、半分はこつちの者だ、二十五錢釣りを持つて來い。

○一日博士は皮包みの牛肉一斤を買つて、家路に急いで居られたが、ふと某宮家を訪問せなければならぬ事を思ひ出して、其の儘宮家の玄関に差しかつた、處が牛肉の遣り場がない、仕方がないので、履いて来た長靴の中へ、そつと隠して置いたが失敗の發端、博士の要談中、宮家の飼犬が早速嗅ぎつけて、これは珍的の御馳走と、長靴諸共牛肉の行衛不明となつた、要談果て宮に送られ、玄関に出て来た博士、これはと許りに敗亡の體、宮に理由を問はれて、何と申上げた者かと、道の博士も大まごつきをやつた。

○博士が大藏次官より會計検査院長に轉任した出任初めの當日、門番に咎められた事は當時有名な噂であつた、夫れから各部長課長への挨拶も、向ふから來るのを待たず、自身でコツ／＼各部室を

廻つて、おまけに、ろく様室にも入らず、半身入口に現したまふ、例の調子で、やア田尻ぢやがといふ鹽梅、この番狂はせに部長課長等は大狼狽に狼狽たこの事である。

○博士が大藏省主税局長たりし時、各府縣の收稅長を大藏省に召集し、自ら議長として諮問會を開いた、處が議論百出、賛否相夾して、容易に決せざるより、博士は起立を命じて採決せんとする利那、或る縣の收稅長は、小官は本案に對しては賛成でもなく反對でもなし、如何にせば可なるかとやつた、博士透かす、極々大眞面目で、中腰で宜しい。

○博士の國富論が面白い、曰く軍備の擴張も國力と相待たねばならぬ、國富さへ充實すれば、軍備の如きは重要な問題でない、金丸の効力は到底鐵丸の及ぶ所でないから、國富んで事情が許すなら、砲臺の代りに黄金の山を築くもよろこい、萬一國際に戰端が開けて、干戈を動かさなければならぬ事が起つた場合には、津々浦々に制札樹て、軍艦一隻を率て降伏せし敵將には金一億圓を與ふとやるです、見る間に敵艦全部降伏、戦ひの勝敗此の一札にありです。

○博士、學問研究の一法として語るらく、學者たるを欲せざる以上は、敢て専門的に井戸掘するの必要はない、さりとして田の如く餘り淺く廣く互るも面白くない、恰も池を掘るが如く、可なり廣く可なり深く研究せねばならぬと。

○博士の悪口に富むことは前回の通り、然し其の悪口は總て諧謔調で、些の厭味を帯びて居ない、博士には又その何と云ふものがと云ふ口癖があ

る、或る物好きな學生が試みに之を計算せしに、一時間の講議中、例の、何と云ふ者が十六回出たといふ、而して此の何と云ふ者が口を衝いて出る時こそ、博士得意の快辯を振ふ時である。

○博士は常に元老を罵倒し、宰相を愚弄し、海外名士の訪問を受けても面會を拒絶する事がある、去れど國家を思ふ熱烈の情は溢れて、時々天顏に咫尺して奏聞する事がある、又同僚の執政を援くる事は實に兄弟の如き者がある、前藏相渡邊君の如き、會禰君の如き、若しくは現任藏相阪谷君の如き、博士の助力に待ちたる所甚だ多いといふ。

○博士は常に曰く現今の元老を初め、宰相以下幾多の政治家も、まだ／＼力量が足らぬ、國家を思ふ存分に料理して、無限大に國力を發展せしむるは、實に青年の雙肩に係ると、斯う云ふ意味から

と云ふではなからうが、博士の青年を遇する事は普通人と異つて居る、大學または専修學校の學生などが、途上博士に邂逅ことがあると、先づ博士から擧手の禮をするので、學生等は大に恐縮して居るさうな。

○博士の奇言奇行は、詮索すればまだ／＼あるが、これで其の人物の一斑を説明したと信ずるか、一先づこれで筆を擱くこととする。

直入翁逸事

○赤裸々の體操、南宗の大家田能村直入翁は實に豪い人であつた、不思議の人であつた、九十四歳の臨終の際まで朝夕年が年中畫を描いて／＼描きつづけた、世間には随分長命の人も無いではない

が翁のやうに始終元氣で、倦まず撓まず丹青を凝した人は恐らく稀であらう、先づ翁の平生の起居に就て少しばかり聞き得たところを紹介じやう、毎朝普通の時間に目を覺ますと、直ぐ臥床の上に突立つて裸體のまま手を振り足を動かして十分運動する、これが壯い者ならば兎も角も、九十以上の老人の而も裸體の體操と來てゐるから、珍も珍も頗る珍な姿が想像せられるであらう、勿論これは九十以上になつて始めたのではない、ズツと昔から年が年中一日も怠らないのだから豪い、今の青年輩が少しばかりの寒さを恐れて、遅起(早起ならばこそ)の臥床を尙も離れともなかり、今日手洗鉢に氷が張つたの、ヤレ手が凍縮けるの足の先きが冷えるのと騒ぎ立て、仰々しく暖爐や火鉢を呼ばり、頸巻や手袋や足袋の在所をさが

し廻つて霜解の跡を一寸見たゞけに目を驚かすのとは殆ど比較者にならぬ、さて裸體の體操がすむと、老人は衣類を着けてゆるゆると庭を散歩し、良い空気を吸うて、それから朝飯を食べるのである、いかにもこれは文明的である。

○腕三里、脚三里、朝飯がすむと今度はお灸をする、この灸は翁が四十何歳の時但馬城の崎で教へられて來たもので、先づ腕三里を實行し、五十歳の時から脚三里にすることを始めて、今年九十四歳まで數十年間一日も怠らなかつた、これも眞似の出來ぬ事である、此の如く何事によらず一旦善いと信じたことを行ふた以上は、一日も怠らないと云ふのが翁の優れた所で、確に一個の教訓である、さて其の灸をする時の老人の姿が面白い、腕三里には襷掛して腕を組んだまゝウン

ときばる、脚三里には腕の方が空いてゐるから詩集のやうなものを持ち、その方に目と心をうつす、これは熱さを嚴く覺えない爲であらう、誠に珍な圖ではないか、このお灸がすむとお茶一杯位を喫んで、いよく揮毫に取掛るのである。

○食物の用心、翁の常食は薄粥に鶏卵で、味噌は柚味噌でも、麥味噌でも、櫻味噌でも、テツカでも、八丁でも尙くも味噌と名の附くものは好いて食べ、蕎麥も好物であつた、また菓物は林檎でも梨でも悉く摺りつぶして、ゼリーやジャムのやうにして食べ、羊羹などもこれを拵りつぶして食べるといふ鹽梅で、物の消化といふ事には餘程心を用ひたらしい、だから翁に長命の法を問ふと、必ず此の食物の事が又はかのお灸の事を以て答へたさうである。

○晝間の睡眠、前に話した如く、朝飯と夕飯の後はよく、仕事に取り掛ると、モウ夢中で側目もふらず、セツセと描いて、午飯時まで描きつづける、午飯がすむと暫く休憩し、それから一二時間は夏冬なしに必ずグツスリと睡るのを常としてゐた、これに就て面白い話がある。

○真似が出来ぬ、其の睡眠の時間には身分の高い人が来ても、いかほど親しい人が来ても、決して面會はしない、悉く謝絶するやうにしてゐた、翁が大阪芝川氏の須磨の別荘に滞在中も例の如く毎日右の睡眠を實行するので、或る時芝川の隠居百老人は翁に向つて、ごうも羨しい、先生のやうに毎日定つたやうに、晝間無頓着に睡ることは真似が出来ぬと笑へば、イヤその代り、貴方のやうに、よい年齢じてゐながら、舞妓に戯れることだ

けは余も真似が出来ぬと、腹を抱へて翁は大に笑ふたさうな。

○一夜に百枚、右の如く翁は毎日一定の時間に睡眠し、目を覚ますと起きて又直に畫をかき初めて、セツセと根氣よく續けるのである、最も晝間は細密のものを描き、夜間は粗畫を描くやうにしてゐた、夜間はどちらか云へば、少し遅く臥床に就く方で、それまでは、例の側目もふらず筆を走らせるから、粗畫などは一夜に七八十枚百枚を描いて除ける、實に豪いものであつた。

○畫をかくのが生命、日頃翁に親しい人や、一家の人たちが、年が年中翁の餘り根氣よく仕事を續けるのを見かねて、偶にはチトお休みなされ、お疲勞が出来ますからと、時として注意することがある、すると翁は慰むかと思ひの外、情ないといふ

顔附にて、余は畫をかくのが好きぢや、健康でゐながら、これを廢めると悲しうなる、三日畫をやめたら余は死んで仕舞ふ、と云つたのには、人々もアツと感ずるばかりで、又二の句が次げなかつたさうな、畫をやめると悲しうなる、三日やめたら死んで仕舞ふとは、道のため、職のため、何たる有難い言葉ぞ、誠に翁は美術そのものゝ化身とも稱すべき人である、畫は翁の生命である、翁は片時も畫から離れてはチツとしてゐられないのである、されば最期近き時まで其の事はかりを考へてゐたと見え、いよく此の世を去るといふ前日、孫の小篁氏を枕許に呼び寄せて、あの鹿の畫は餘程よく出来てゐるから、金泥を張り込んで寫生して置くがよいと、囁語を漏らした、翁の囁語はたゞ是ればかりである、その鹿の畫といふのは

何を指したのやら、小篁氏には思ひ當る所がなかつたさうなが、兎に角翁が畫の事はかりを考へてゐたことが判る、また感心なことには、翁は普通依頼の畫よりも何々會設立又は何々堂建立などのため、寄附する時の畫の方に精神をこめて描いた、また決して他人の畫を廢すやうな事はしないのみならず、如何なる流派の畫といへども喜んで目を留め、如何なる後進者の畫といへども一々綿密にながめた、もし古畫の懸幅などの鑑定を乞はれた場合には、翁は其れを床に懸けて先づ息小齋、孫小篁の兩氏を始め門人たちにも見せて、それらの意見を参考にし、然る後自分の意見を述べらうにした。

○好物は淨瑠璃、翁は衣類に就ては特別の嗜好を持たなかつた、たゞ和らかなものが身體のために

よいと云つて、いつも其の擇みのものを着てゐた、
そして身を質素に持つたにも似ず、至極華美な事
を好み、畫會や其の他の會の時などは成るべく華
美に催した、一番好物なのは淨瑠璃で、或る時人
に向ひ、余は丹波に門人が出来たと云ふから必定
畫の方と思ひの外、イヤでん／＼の方ちやと翁は
笑ふたさうな。

○腹減しの講釋、これも芝川氏の須磨の別荘に滞
在のころ、翁は毎夜下女男を集めて、むつかし
い淡籍の講釋をきかせた、論語陽貨篇に子曰く女
子と小人は養ひ難しといふ事が出てゐる、この小
人といふのは下僕召使のことぢや、お前たちも忠
實に奉公せねばならぬ、養ひ難しなご云はれぬや
うにせねばならぬと、こんな風に講釋する、下女
下男は最初の程こそ判らぬながら忍耐して聴いて

ゐたが、毎夜々々のことだから堪らない、ア、ま
た論語が始まつた、今夜は孝經が、耳痛くも何と
もなじと、いつしか居眠つて夢現の有様、そこで
別荘の家族が翁に、あのやうな連中には何を仰有
つても通せぬゆる、お廢めなされと忠告した、こ
ころが翁は、イヤ余は腹減しにやつてゐるのぢ
や、人形を前に列べた積りで答へたさうな。

○有封の祝ひ、翁は戌の年で今年から有封に入る
のである、そこで昨年の十二月三十一日の夜、社
中門人を始め出入の男女を集めて盛にお祝ひし、
今年からこれを例として、除夜には必ず祝宴を開
く筈になつてゐた、さてその時に翁は富士、帆風
船（福助とお多福の乗つてゐる）袋、封金、御祝
儀とかいて水引掛けたところ（を描き）むつまじ
く船に福助夫婦連れ袋封金ふじの山ほご」と贊し

て出席者に分配した、封金ふじの山ほごはいかに
も慾張つてゐるけれど、露骨に歌つた所がなか
か無邪氣で面白い。

○ごごもの命名 昨年翁が東京に上りて上野の寺
院に滞在中、京都に於ては孫小篁氏の三男が生れ
たので、早速其の事を翁の許にいふてやつた、そ
して何と名を付けませうかと伺つた、すると翁は
即座に「康三」がよいと返事した、これは自分が
徳川家に縁故のある上野に滞在する所から、家康
の康に三男の三を加へて名付けたのである、さて
お祝ひの赤飯の代りに、翁は匏から蘭の生えてゐ
る戯畫をかき、其の上に「三男を安くこきだす子
寶は世にもてはやす福へなる蘭」と贊したものを、
心易い先方々々へ贈配つた、匏を福へと書いて福
の字をあらはし、らんを蘭の字にしたところが洒

落れた積りなのであらう、翁はをり／＼こんな洒
落をやつて人を笑はせた、ツマリいつも若々しく
陽氣であつたからであらう、其の陽氣の目出度い
高齡にあやかるため、翁に出生兒の命名を乞ふ者
が多かつた、昨年京都の某家に二十年振りに女の
兒が生れた時、翁はこれに「きみ子」と名付けた、
きみ子とは餘り名が善過ぎますと謙遜したとこ
ろ、翁は莞爾として、二十年振りに生れるとは誠
に珍らしく目出度い子ぢや、天から授かつた子ぢ
や、天の位は即ち君ぢやから、それを仰いできみ
子と名付けたのぢやと説明した、左様かと思ふと、
これも昨年他の某家に六男が生れたので翁に命名
を乞ふと、翁は早速「馬六」と名付けた、午の年
の六男を示したのである、いかに最もだけれど
も馬六はをかしい。

○かまやせぬの帛紗、俳優珊瑚郎は栢園と號して翁の舊い門人である、翁の計をきくや親に別れたやうに悲しみ、早速京都にゆきて靈前に手向け涙の袖を絞つた、そして毎日床に翁の畫幅を懸けて供物してゐる、この珊瑚郎所持の帛紗に就て面白い話がある、以前角座に於て右團次、福助、壽三郎、雁次郎、珊瑚郎、巖笑、多見之助等一座の芝居があつた頃、樂屋で稽古の時例の蒲團争ひが起つた、蒲團争ひとは座席の順序を争ふことである、珊瑚郎は翁にこのうるさい事を話したところが、翁は無頓着の口調で、随分芝居道には面白い習慣があるな、ヨシそれなら余が一ツかいてやらうと云つて、即座に筆を走らせたのは榻の圖で、其の上にかまやせぬたさいをいごにひかれても人をたすけてやると思へば「假名遣ひ」までもすべて無頓着の

地上畫の清正、翁が初めて竹田先生に目をとめられたのは九歳の時である、或る日直入村(豊後)の八幡宮の境内に於て、他の子供等と一所に地上に畫をかいて遊んでゐた、翁のは加藤清正の畫であつた、そこへ竹田がフト通り掛つて見たところ、清正の畫が一番物になつてゐるから、竹田は戯れにその子供(直入翁)に、どうぢや畫を稽古せぬかと云ふた、翁は其の時分から畫が好きであつたから、家に歸つて両親に是非とも稽古にやつて下されと頼み、それから竹田の門人になつたのである、或る日竹田は海に舟遊びした時、戯れに翁に向つて、この水はごちらへ流れてゐるかと問ふた、すると翁は直に、舟の行く方へ流れてゐると答へたので竹田は大に笑ふた、また或る時米を洗ふことを命じ、これは水の濁らぬやうになるまで、か

しぐのぢやと注意した、翁は正直に幾度も洗ふたが、なか／＼水が澄まぬので、普通の米かじぎよりも三倍も時間を費した、竹田はこれを見て大いに笑ひ、貴様は馬鹿正直な所があると云つて名を「癡」字を「願絶」と附けた、これは願絶之名の三絶の故事に據つたのである、三絶とは才絶、畫絶、癡絶で、即ち其の癡を取り願絶子の願を取つて願絶と名附けたのである。

○田舎芝居の歌、以前當地博勞町難波神社の神樂所の襖(今は焼けて仕舞つて無い)に、翁が墨畫の松と長春花を描くことがあつた、翁は長春を生燕脂で彩色する代りに洋紅を用ひた、其の頃洋紅の如き舶來繪具はまだ大いに珍らしかつたのである、(序に翁が在飯の頭岡侯の命によりて、三尺幅の絹に鶴と極彩色の竹を描いた時も、其の竹

を西洋緑青で彩色した、これも同じく舶來繪具が珍らしかつたからである)、さて松の葉を、翁は殊更に他のものとは平均の取れぬほど、法外に大きく描いたので、人々不審に思うて其の理由を問ふた、ところが翁がいふには、余が豊後に居つた時、岡城下の近在の素人芝居の幕に、畫をかいて呉れと頼まれた、其の幕は白木綿であつた、余はそれに墨畫の梅をかいたが、殊更に花を徑八九寸位に大きくかいた、殆ど不均であつたが、さて舞臺に引いて見ると丁度よい加減に見えた、この幕が余の大きなものに筆を染めた最初である、すべて屏風でも襖でも、大きなものに描く時は、其の心得を持たねばならぬ、余が今松の葉を法外に大きくしたのは、其の理由である、もし小さく描かうものなら、全體にながめた時に、チツとも目立た

ぬちやと説明した、味ふべき言葉である。

○人物の研究、翁が豊後から上つて来て、初めて草鞋を解いたのは堺の地である、其の頃大阪難波の鐵眼寺に繪畫の展覧があつた、霸氣勃々たる翁は「小虎」の落款で、粗密二様の山水、花鳥、人物を出品した、併し悲しいかな其の頃は半江などの名こそきこえたれ、小虎の如きは何處の何人とも云ふ者がなかつた、小虎は出席してそれとなく觀覽者の批評に耳を傾けてゐた、すると一人がフト小虎の畫に目をこめて此の小虎といふ男は人物も出来るらしい、と云つたので、ハハアこゝだなどと翁はうなづいてそれから人物の研究に力を注いだ、その頃の南畫は密なものなどは描かなかつたらしく、それゆゑ小虎の密畫人物は異彩を放つたものと思はれる、翁の百童子、十八賢子などの大

幅を觀た者は、其の人物の骨格といひ、活動といひ、成程豪いものと感服せらるゝであらう。

○觀音の靈驗、翁は年來觀音さまを謹んで多く描いた、翁の觀音さまは一種何ともいはれぬ有難い氣高い相が具はつてゐる、以前出雲に遊歴のころ、松江町より東五里許りの大東町といふ處から、一里許りの山里に蓮華寺といふ寺がある、こゝの本尊觀世音は靈驗殊に著るしいので參詣者が多い、翁はこれをきいて、或る日その觀音さまに參詣したところ、十二歳の少女が、寒中洗足にて嬰兒を脊負うて同じく參詣してゐる、翁はそゝろ不惑に思つて、懷中から二十錢を出し與へて、其の住所氏名と參詣の事情を問ふた、その少女は大東町の貧乏人某の子で、母が病氣に罹つたゆゑ、平癒を祈るため日參してゐるが、不思議にも醫師も手

を放すほどの病人が、追々快くなつて来たとの話、是れ全く孝心が通じたのちやと翁は大いに感じ入り、宿に歸つて、早速觀音の密畫を描き、之をかの少女にやつて呉れとの事に、翁に附添へる人々の其の畫を表装して少女の許に贈つた、此の評判がバツと世間に廣まり、少女は遂に時の堺島根縣知事から孝女として賞金を下賜された、其の後翁は四國に渡り、讃岐の高松地方を遊歴の際、或る處で僧侶が説教中に、右の孝女の談を持ち出して觀音の靈驗を説いてゐるのを、翁は丁度其の場に出會して聴聞した事がある、翁は平生この事を引いて、善事は行はねばならぬものちやと人々に語つた。

○汽車旅行の家苞、昨年翁は東京に上り、歸途確氷峠や更科の風光を賞し、川中島の古戰場に昔を

思んだが、何しろ久々の旅行ゆる汽車は珍らしく、お茶くんと驛々に賣る茶碗を翁は買ひ集めて京都に歸り、その驛々の名を清風にかゝせて、昨年の十一月講神祭の當日に用ひ、菓子には「越路の雪」といふのを出したのは、いづれも旅行に因んで面白い新趣向である、風流の士は翁のこれを學んで、更に趣向したら妙であらう。

○餘程下手と見える、翁は丁稚や子供が、巧に自轉車に乗り廻るのを例に引いて、ア、彼等に比較すると余は餘程畫が下手と見える、彼等は時どして片足などで自由自在に乗り廻るが、余は九歳の時から今日まで晝夜研究した甲斐もなく、矢張り五本の指を使はねば畫が描けぬ、シテ見ると余は餘程下手と見える、丁稚等が少この間の稽古にも似ず、あのやうに片足で見事に乗り廻る割合から

云へば、余は筆を一寸紙納の上に投げたゞけで、直ぐ書が出来ねばならぬ筈ぢやが、それが出来ぬとすると、私は餘程下手と見えると語つた、また昨年東京に上つた際、揮毫の依頼者が、たゞホンのお名前とお年齢だけで結構ですからと云ふた、シテ見ると余はいよゝゝ書が下手になつたらしい、と大笑ひ、書が下手と見える、書が下手になつた、意味の深い言葉である。

●思掛ない一卷、直入だけは流石に豪いものぢや、余等はまだく靴取りぢやと、鈴木松年畫伯は常に翁に敬服してゐた、松年氏はなかくの粹人風流人、或る時藝妓舞妓数人に取り捲かれて宇治へ遊びに行つた、丁度その頃直入翁は、黄檗の獅子林院に引籠つてゐたが、松年氏はフトこれを思ひ出し、折角宇治へ美人を連れて來てゐながら、尋

大椅子に倚り掛つてゐたが、松年氏を見るより、オ、松年さんよくお出でた、余は貴方を待つてゐたところぢや、併しお同伴は何處に、イヤお構ひ下さるな同伴といふ程の者ではと、松年氏挨拶するを翁は打消し、遠慮なくこゝへと云ふた、松年氏は其の實故意と、美人連を直入に見せてこまさうとの下心があつたから、然らばと此方へ呼び入れた、併し流石に人馴れた藝妓舞妓も、冒し難い翁の姿といひ、一風異つた此の場の有様に氣を吞まれて、手をもぢく椅子に腰も落着かなかつた、座敷は寂としてゐる、この時翁は至極眞面目な口調で、松年さん丁度よい機會ぢや、余は貴方に鑑定して貰ひたい物がある、徐ろに取り出したのは結構らしい一卷、サラサラと一座の前に披かれたが、這はいかに極艶ッばい秘戯さまゝの圖、

常の遊びでは面白くない、一番黄檗に直入翁を驚かして呉れうと、獅子林院にゆきて、是非とも翁に面會したき由を申し入れた、すると取次の者が暫くお待ち下されとの挨拶、よろしいと一室に控へてゐる間、藝妓や舞妓は四邊の聯額のみづかしく、ひよこ歪んだ文字を笑ひ、柱や門や窓の唐臭いのを品評して、禪も椀も味噌も納豆もあつたものではない、たゞ多愛もなくキヤツキヤツと戯るゝを松年氏。こゝは猫の場所ではない、杓子の境内ぢやから、チト殊勝にするがよいと制する時、取次の者いざお通り下されといふ、そこで松年氏は美人連と離れて、自分一人だけ彼方へ通ると、廣い座敷に椅子がズラリと數脚排列べられてある、そしてこれらの座席に對して、直入翁は頭巾道服の脱俗姿で如意を持ち、悠々として天然木の

唐畫などの山水と思ひの外、仙人童子の扮本と思ひの外、藝妓舞妓にも一見鑑定の附く品物、ごうぢや松年さん能く出來てゐるか、貴方は譯のだらうとニツコリ、それからと云ふものは松年氏會ふ人ごとに、直入は狸老爺ぢや、余はあの時こそは膽を挫かれた、冷汗が流れた。

●力士か講家か、京都の某富人或る時翁の許に至り、愚息を入門させたき由を頼んだ、すると翁は、御子息は如何いふ方ぢやなと問ふた、イヤ實は愚息は少々病身でございますから、書を稽古致させたいと存じまするので、皆までさかす翁は穩かに之を打消し、それは止められた方がよい、力士になるか、畫家になるかといふ位のものぢや、病身ではいかぬ。

●三味線入の揮毫、翁が病氣に罹つた日（一月十

藤原忠一郎氏の言行

五日)の兩三日前の夜、或人が翁を訪問した、ところが、翁の書室に三味線の音がして何やら粹な唄がきこえる、九十四の老先生、相變らずお若いことかな、如何な美人の手すさびであらうと、其の室に通つて見ると案外、三味線のぬしは梅子老夫人であつた、翁はその唄をききつゝ、左も愉快げに梅林の山水を描いてゐるのである、ヤアえらい所を見られたな、兎角老人は婆さんの相手に限る、若い婦人のところに近づくと魔がさしてならん、三味線をききながら描くと畫がよく出来る、と大いに笑つて描きつゞけてゐた、翁は時々かやうに三味線入の揮毫を試みたさうな、惜しいかな右の梅林山水は遂に絶筆となつて、翁は永久世を去つて仕舞つたのである。(翁に關する話はなほいくらでもあるが先づこれで一段落として置かう)

○忠一郎さんの學校時代の亂暴は本欄にかいたが、卒業して京都へ歸つてからも、相變らず亂暴を續けて居た、そこで親父の源作さんも大いに困つて、大和八木町の某方へ鹽踏の奉公をさせたが、どうして究屈な勤めなごをする人ではない、某も途には恐れ入つて、態々京都へ伴れ來り、源作さんに手渡して「こまア〜餘程優和しくなられました、是れなら御安心でござります」と云ひ捨て歸つたそうた。

○感心な事には源作さんが亡くなられてから今年で六年の間、一日も缺かさず毎日午前十時三十分

が、夫は實際止むを得ぬ時の事で、大體はテクテクとお歩ひでお出掛けなさる。

○今年は三十九の男盛り、妻君は奈良市の素封家松田菊造さんの長女で名を照子(三十二年)さんといふ、容貌も好く、至極伶俐で、姑のお萬さんと、夫の忠一郎さんとに誠心を以て事へてゐる、是れも平生は瓦斯絨織に黒襟の掛つた衣服、黒縹子とモスリン友禪の晝夜帯をじめて、朝は早くから夜は遅くまで臺所へ出て下女を監督する、それで藤原家へ嫁入つてから、もう十年にもなるが、祇園の中村樓も知らねば夜櫻も知らぬ、有名な都踊も今度大隈伯が來られたについて始めて陪觀されたそうな。

○生活向は總て質素で昔風を主として居るが、商賣の上には非常にハイカラ主義を實行して居る、

三十六年頃早稲田英語政治科を卒業した男二名を雇ひ入れ、直に韓國へ視察に遣り、木綿の需要に就いて研究させたが、其の後又同大學の法律科卒業生を雇ひ入れ、夫等を店員として大に業務を擴張した、然し是等の人々にも家風はちやんと守らせる、即ち木綿衣服に前垂、苗字などは一切呼ばず、徳ごんとか末ごんとか舊式に呼び交させて居る、處がその成績が非常に好いので、本年に入つてから學習院學士一名、大阪商の卒業生五名を雇ひ入れ、最も活潑に商賣する、さうして夜中は一切外出嚴禁、食事は家人一同ずらりと長い卓子の前に座つて、上は主人夫婦から下は丁稚小僧まで、一人づつ小さい飯櫃を宛はれる、その食料が一人につき一箇月三圓五十錢、それは毎月給料から差引くことになつて居る。

○商賈にかけては進歩主義でも、家は極めて守舊主義で、この世の中に電燈を使用せぬ、いや電燈處ではない、洋燈も使はぬ、廣い家の室々には今も行燈がホノ暗う照されて居る。

○忠一郎さんが早稲田専門學校へ入らぬ前は尙更亂暴も亂暴、所謂壯士の群に入つて活潑な運動をした事もある、それはその交際する人が、京都壯士の元祖と云はれて居た、建林又太郎などの連中であつたのでも知れる、明治十八年三月四條河原で壯士大運動會を開き、爾後引續き二三年間も遣つて居た、その時の發起人は建林又太郎、川上晋次郎、溝口市次郎、さうして忠一郎さんであつた、夫で源作さんは口癖の様に「建林は悪い人ぢや忤を壯士に引入れた」と云うて居た。

○早稲田の學校出であるだけ大隈伯を神の如くに

八車を十二三輛もさし廻して、悉く早稲田の邸内へ運び取つた、けれどこの澤山の松茸を何う處分したものであらうかといふのがさし當る一問題で、一家中評議區々であつた處へ、幸領の山番バタ／＼駆け付け、主人の命令にはこの茸を悉皆お庭の築山へ栽えて來いとでござりましたといふ、伯を始め一家中の面々流石は、藤原のおとよ、好い工夫をした、庭園の茸狩は妙であらう、といふので多くの松茸を三日掛りで栽えさせた、素人と異ひ山番の腕に栽えられたのであるから、一寸見た處では自然に生えた如くである、伯は愈々歡んで、京中の親戚知友を招き、茸狩の大宴會を開いて、非常の喝采を博したさうな、然しその宴會の入費が、葎代の三層倍も掛つたといふ。

○忠一郎さんは又一面に禪味を解して居る、深く

信じて居る、大隈伯の事といふと目も鼻も無い、伯も又忠一郎さんが富豪の主でありながら、一風異つた處のあるのを認めて、一方ならず寵愛して居る、二三年前の事、伯が松茸好物の事を聞いて、是非茸狩にお出で下さるやうとの案内状を出た、伯はその請待状を得て大に歡び、さらば行かうとの返事があり、藤原家でも種々に準備をして居たが、さらばとなつて伯に差支へが生きて、斷りの手紙が來た、忠さんの失望一通りでない、然し切角思ひ立つたことを中止するのは面白くないといふので、その秋持山の松茸は一本も他に採らせず、今が眞盛りといふ時、何千貫かを一時に採り上げ、貨車幾輛かを買ひ切つて、一人の山番を幸領に付け、東京へ持ち出させた、伯の方でも報知に由て此の事を知つたから、汽車の着くまでに大

桃山の愚庵和尚に歸依して常に往來して居た、和尚遷化の後、舊庵を買ひ取つたが、それを他に借すでもなければ賣るでもなく、門扉自在に風の開閉するに任せて居る、和尚手栽の果物が實りでもすると、和尚の舊知へ頒ち送つて「これは愚庵で生じた密柑であるから、一つお裾分を致します」。

○愚庵遺物の中で、最も大切にされた粗末な懐中時計がある、それは滴水和尚から峨山和尚に傳へられ、峨山和尚から愚庵和尚に傳へられたのであるが、和尚遷化の後には紀念として忠一郎さんに送られた、忠一郎さんは又それを滴水、峨山、愚庵三和尚の知人であつた鳥居素川氏に送つた、素川氏は之を愚庵の法嗣たる元策和尚に送らんとするも、和尚より姑く預りくれとの事で、今は素川氏の手許にあるさうな。

○三四年前の事であつた、京都府から召喚状が着いたので、例の木綿衣服に前垂「藤原商社」の印ある番傘をさして、車にも乗らずテク／＼出掛けて行くこと、受附掛はケツンな顔して「今日は代人ぢや可けん是非御本人に限ります」。

○本業は木綿問屋であるが、兼業として金貸を営んで居る、家風から云つてもその貸出先は堅氣の商家でありさうなものが、實際は爾うで無く、祇園の貸座敷や、新京極の劇場、其の他で忠さんの金を借りて居ないものは殆んど無いさうな。

○公共の事には少しも金を吝まぬ、その一例として斯ういふ事がある、去年の初夏の事であつた、高田法學博士や松平康國民などが清國漫遊の途次京都へ来て、中村樓で懇親會を開かれた、その席上で義勇艦隊寄附の話が出て、夫れなりけりて散

會となつたが、翌日の朝藤原家の丁稚が同會幹事の許を訪つて、一封の書面をさし出した、見ると中に一百五十圓包んであつて、京都校友會一同より、義勇艦隊期成會寄附にあつた、因に忠さんは何事に由らず自分の名を現す事が嫌ひで、金は自分が出し、名前は京都校友會一同とする場合が多い。

○去月大隈伯が京都へ來られた時、中村樓で伯及び夫人の請待會を開いた、發起人は云ふまでもなく忠さんで、例の校友會一同からといふ名義であつた、そこで忠さん、中村樓の女將に逢ひ「今度は大隈さんがお越しになるから料理は一人前十圓づゝにしてくれ」といふ、中村樓ではまだそんな高價な獻立をした事が無いから「とても爾うはなりません」と辭退するのを「いや何うあつても

爲ろ」と承知せぬ、そこで幹事の人々が氣を揉んで「料理の事は此方でします、あなたは暫らく御別席下さい」。

○この請待會が終んでから、何をして伯を饗應したものであらうと考へたが、さて是れといふ法案も無い、京都といへば名物は都踊といふので、米國陸軍卿タフト氏やノエル大將の來られたる時、市から臨時に都踊を催した事があるが、また一個人で遣つた者が無い、これは是れに限ると胸算用は極たものゝ、例の自分の名義を出すのを好まんから、表面は早稻田大學有志の催しとして正賓は伯夫婦、府市の紳士數百名を招いて花々しく都踊を催した、その費用が二三千圓も入つたといふ。

○すると翌日、女紅場へ電話を掛けて、昨日の拂

ひをする、直取りに來い、というて遣つた、女紅場では市のお拂ひでも二十日位は掛りますから、どうか二三日お待ちを願ふと、何遍斷つても聞き入れず「イヤ何うしても拂ふ今日中に取りに來い」これには女紅場も困つたさうな。

○その請待のお禮として伯から忠さんへ硝子蓋の時計、細君の照子さんへ女持の時計の鎖を贈つたが、誰あらう多額納税者の奥さんともあらうものが、何にするものか分らるので、直に人を伯の旅館へ遣り、只今頂戴した物は何に使ふのでござります。

○忠さんの奇行はまだ澤山あるが、是れで一時終りとする。

(終)

島田蕃根翁逸話

○翁は有名な藏書家で、一時は三萬巻以上も有つて居つた事がある、翁の家の玄関より大長持に、書籍が溢れて居り、二階の五六室も皆書籍許りで、翁は其の中に晏如として、破机を置き、佛様も、火鉢も同居して座右にコロ／＼して居つた事があ

る。
○書生が往つて書籍を借ると、大に御機嫌に召し、彼の人は篤志な人ですと逢ふ人毎に賞める、書を貸して喜ぶ人は翁ばかりで、幾人我が別はない、併し善く人を忘れ、昨日逢つた方も今日は忘れ、九で木偶の様ですとは翁の謙遜の詞

○翁の負債と言つたら、書籍屋許りで、毎に千圓以上に登つて居る、例へば四十五圓を懐にして借

除き、盡く書籍を買つた時と言はれた。
○京都の弘教書院で、一切経を縮寫したのも翁の發起で、翁自身校正の任に當り、一々綿密に目を通して校訂したといふ、其根氣と云ひ篤志と云ひ、決して尋常ではない。

○翁曰く、私は吉田松陰の兄さんと懇意であつて、松陰とは面識ないですが、其當時或は松陰を氣狂ひかと思つて居ました、併し後から見れば九で神様で、人間ではないです、今生きて居られたら私に三つ年下ですから七十八です、其の兄さんは至極篤實な方で、之も人物でした、一體長州の人間は色好みが多いですが、松陰丈は無垢です。

○翁又曰く、肥後の横井小楠といふ人は親孝行な人で、或る時私の藩に遣つて来て、酒宴を開いた時、小楠がいふには、自分は平生大酒家であるか

金を返しに行くといつて、歸りには五十圓以上の書籍を買つて來るといふ鹽梅である、又買つた書も忘れて歸り、次に往つた時、向ふから持つて歸らぬかと催促せらるゝ事がある。

○或る寫本でも見、古人が丹精を籠めたものを見れば、自分で買つて歸り、其の用不用に拘らず、古人の丹精を無にするは残念といふ工合、或る時開成齋で開板した經史百家の書を、教部省が不用だと言つて清國公使に賣り飛ばさうとした時、翁は之を残念に思ひ、高利貸から三千圓を借入れて、自分で買つて仕舞つた、其の後始末は勝伯がつけ

て呉れたといふ。
○翁に一番嬉れしかつた時は何時ですと問へば、教部省に奉任した時、家族は郷里に居るし、受取つた月給の七十圓より書生と自分の食費三十圓を

ら、親が心配して旅中は決して三杯より過さずべからずと戒めたのです、それで三杯以上は決して飲まないですが、其の代り巨大な杯で願ひますと翁語り丁つて微笑を合む。

○或る時石黒忠惠男が私に、阿方は是れまで大分な人にお逢ひなすつたが、是れは偉いと思つた人がありますかと聞くから、私は偉いと思ふたのは一人も出逢はぬ、夫れは偉い人がないではないが、自分が偉くないから偉い人を見出すことが出来なかつたのです、凡て拘摸は拘摸仲間、チャンと仲間の偉い奴を見出す、私は何んにも偉くないから、悲しいかな偉い人に出逢はぬと答へた。

○阿方はお金が取れますかとは、ダン抜けに初對面の人に投げつける翁の言葉、而も其言葉は柔和

著述をなすの志ありとか、翁の如き稀代の人物を世より取残し置くは惜しきものである、丸で希臘の古賢を目の當りに見る様なものだ。

狩野亨吉氏逸話

○君は元來文學的嗜好を有し、中學時代より大學豫備門時代に亘り、好んで英小説を讀みぬ、然れば當時舶來の英小説は大抵讀破せざるなかりこといふ。

○然れど一朝悟る所あり、小説は皮想浮薄の言辭を弄するに過ぎず、未だ以て宇宙人生の奧義を解するに足らず、宜しく眞正の學術を修むべしとて、小説と正反對なる數學を修むるに至りしこと。

○併し天性の嗜好は枉ぐべからず、更に文科に入

で含蓄があり、イエ取れませぬと云へば、夫れは不可ない、お金を取らなければ不可ぬと、諄々説き起し、最後に恒の心なくしてお金許り持つものは罪惡を造るのみ、お金よりも先づ心を定めねばならぬと結びをつける、突然聞けば放言の如くして、後には訓戒を含む、味へば深く意味がある。

○翁は四十年來の綿服主義で、自ら質潔主義と唱へて居る、言ふ心は質素で潔白といふ意味、夏も冬も木綿の袴で、飄然東京市中を闊歩して居る。

○翁の博覽強記は驚くべきもので、俗に先生の先生と稱へられ、大學教授連も常に翁に教を請ふのだ、翁殊に佛典に通じ、曾て大學の佛敎講座を受持つた事がある、翁は生きたる百科全書といふても差支ない。

○翁は老後の事業として、群書解題ともいふべき

り哲學を修め、理學士の上に文學士の肩書を重ねるに至つた、肩書などは君の意とする所にあらず、今に博士號なきも君が無頓着の以のみ。

○君は意思の人なり、身を修むる頗る嚴、洋服を着けて終日危坐し、客に接す、而も倦むことなし、温良恭謙、未だ曾て激語を發したるなし。

○斯る君子人も、心の奥に鋼鐵を藏め、曾て金澤に赴任するとき、積雪丈餘、絶えて人跡なし、道中熊の出沒するを以て、人視て危じとす、君平然として、案内の小童を雇し、われ鐵砲を有せりとて何ものかを示し、遂に金澤に達せりと、聞くも其の暴に驚く。

○學校に奉職し、校長と意合はず、職を擲つこと敵履の如く、飄然東京に還る、此の奇矯の行ひありしを以て、後第五高等學校に赴く累をなせり

○君は又情の人なり、學生の窮を憐れみ、資を給せしこと多く、其の金澤を去るときも、生徒の遠路送り來らんことを憂ひ、故らに彼等が發火演習に赴きし間を擇び、出發したりと、以て有情の人なるをも知るべし。

式田老農の篤行

○大和の老農式田喜平さんの事については本欄に出しよが漏れた處を二つ三つ話さう、

○品川子爵が農商務大臣に成つた時であつた、喜平さんと呼び寄せて、お前は大和米の改良に熱心で、どう〜成功させたといふが、どうして遣たね、と尋ねられた、喜平さん答へて曰く、これが

普通の手段では能きませんので、勿體なくも春日神社と大神神社の御田を借りる事に致し、試験に好成績を得た時は、最上の粃六升つゝを献上して、之を参詣人に少しづつ分配したのでござります、何が神様の御田で生きたといふので、我もくも戴いて歸る、翌年は自分の田で作つて見ると、それはく好い米が穫る、是れが評判になつて遂に全國に普及されたのでござります」といつた、品川子爵はこれを聞いて、爺さんが神様を利用したのは面白い、蓋しお前の熱誠を春日様や三輪様が御嘉納あらせられた理であらう、お前は眞に老農であるといふので、夫れから後の手紙にはきつと「老農様」と書いて越されたさうだ。

○夫れからある時、喜平さんを東京へ招いて云はれるには、お前も作つたり、植ゑたりする事は甚

く上手であるが、他人に施してばかり居ては金になるまい、百姓は凶作の備へがなくてはならぬ、お前は何うか、と訊ねられた、爺さん早速一首を認めて、子爵の手許へさし出した、夫れは斯うである。

百舌鳥でさへ冬の用意をするものを
人と生れて園はんは阿呆

これが私の持論でござりますと遣つたので子爵も「田を作るのは上手だが、歌は下手だな」と笑はれたさうな。

○一寸見ると、一文の價値もない爺さんであるが、農事には神様であるので、諸方の相談役や顧問や審査員を頼まれる、さういふ公事には敝れた袴を引きかけるが、常は例の木綿着物に袋笠を被つて、草履穿のまゝ諸處方々を駆け廻る、爾う

して途中に牛馬の糞でも見ると、可憐に拾ひ取つて、近所の田畑へ入れて遣る、近所に田畑のない時は、擔いで居る菅菰へ入れて田畑のある所へ持つて行き、誰の田畑でも關はず投げ入れて遣る、「爺さん、何が一番楽しみですか」と問ふと「斯うして道を奇麗にするのが楽しみぢや」と答へて居る。

○のみならず通行の道筋に稻穂や野の花の取亂れであるのがあると、必ず奇麗に繕つて遣る、路上に小石や硝子の破片が落ちて居るのを見ると、通行人に危険ぢやといつて時間の頓着なく捨て遣る、もし何うしても自力にへぬ時は持主や近處の人へ注意をして遣る。

○品評會や共進會へ招かれると、例の姿で遣つて行て、難しい演説や祝詞の代りに、左の如き

自作の歌を讀み上げる、その歌には一かどの道理がある、左に紹介しやう。

百姓は種をたやすな公訴するな

鋤をねやすな期起きをせよ

垣は桑さつきをひきて茶を植ゑて

鶏飼うて朝起きをせよ

一生の守り本尊たづぬれば

米 麥 蔬 菜 木 綿 衣 服

○大抵は前に記した三首の和歌で遣り通すが、時に由ると左の如き祝文を讀むことがある。

抑 鋤は神代の昔より形も變らず、世に納め家に整ふ道具にして、雪中の筍黄金の釜も此の鋤を以て掘り出せり、かゝる寶の鋤を捨てよ、及ばんことを願ふべからず、

と、斯いふのである、さうして夫に一句を添る。

田に畑に打出の鉄の小土かな

○喜平さん常に曰く、世が開けると金が要る、是れが昔で御覽なされ、帽子も入らねば蝙蝠傘も要らぬ、流行病もなければ學校も無い、然し今では夫々に金が要る、百姓だからとて子供に鉄ばかりは握らせて置かれぬ、そこで農家の状態はと見ると、矢張り昔のまゝを固守して居るから到底經濟の持てさうな筈がない、といふので盛に副産物を奨励して居る、維新以來、蜜柑や柿や林檎やら幾十種も取り寄せて、三年五年と試験しては、良好な物を人に分けて遣る。

○世間は流行熱に罹つても此爺さんは毅然として高く標榜して居る、特に作物は慎重の態度を取らぬと取り返しに附かぬ事になる、百姓の考へは極めて單純であるから一度仕損じると忽ち懲りて後

を作らぬやうになる、桑や菊は百姓の副業として最も適當なものである、前年ある地方で失敗してから、懲りて作らぬやうになつたのはその前轍であるといつて、一年や二年成績が好くつてもそれに惚れる様なことはない、だから爺さんの試験を経たものは必ず好成绩が擧るといふ。

○爺さん又曰く、ごんなに忙はしくても試験場を見て下さる方がある、時間を吝まらず案内をした上で、種子までを進上するが、本氣になつて見て下さる方の少いには困ります、衛生を重んずるやうになつた結果は、果物の必要がある、海魚の多く捌ける如く川魚の需用時機がきつと来る、それで百姓の副業には果樹を植ゑるのと、水田に鯉を養ふのとが急務である。

はありませぬ、薪も炭も味噌も醤油も綿も衣服も畑から出る、これを大切に利用すると、何不自由なく遣つて行ける、私などは年中錢を出さずに製へます、それから小鳥を大事にするのが百姓の務めでございます、小鳥は農作物に對する天然の害虫驅除を遣つてくれます、近頃果物に蟲の多くなつたのはお素人の獵銃家が、ボン／＼お遣りなされる結果と信じます、私の宅には月ヶ瀬の梅も、吉野の櫻も、龍田高雄の楓もござります、私はこれを見て一年中を楽しく送つて居ます (終)

女浪人零丁奇談

棚橋 絢子 述

この一篇は棚橋絢子老女史が、一代の經歷を他人に擬して叙述したる演説の原稿なり、讀者其心してよ。

舊傳餘錄

○今日は何ぞ目出度御話をと存じましたが、世の不景氣につれて薩張種切れ詮方なしの境草に、目出度どころか如何にもみすばらしい、女浪人零丁奇談といふ、古い／＼昔語りを、あそこ／＼切ぬきて、面白くも可笑しくもない一場の御話を致しました、なれども是れは偽りも飾りもなき實際の御話にて、其の本人が目前にあるかも知れませぬから、皆さん其の思召で御聞願ひます。

○目出度立派な事は誰も願はしう存じますれど、此人間世界は移り替るが常態にて、年中花の咲く春許りとも参らず、秋といふうら悲しい時もくれば、冬といふ物淋しい折もありて、兎角此方の注文には外れ安い者であります、此の移り替りて造化も行はれ、四時も成ると申すものであります。○人の一生も其の通りにて、何も御目出度結構な

事許りと云ふ譯には參らず、富貴安樂の裏には貧賤憂苦が附て廻り、誰やらが詠歌の通り「今日見れば昨日の沖の淺香がた潮のみちひの世の態なる」是れに相違は有ませんが、其の態が即ち實理の流行にて、元より可厭可驚事ならねど、人情の常として年中春にたく思ひ、一生安樂を買切の様に心得るより、一旦世の變遷、事の齟齬に遇ふときは、天を怨み人を尤めて、窮すれば亂するのあらぬ様に成行ます、猿まじい事では有りませんか。

● 借爰に演じます女浪人云々の御話は、或婦人が大阪を出て美濃尾張に漂泊し、具に艱難辛苦を嘗めて、東京に落附く迄の一代記を抜書にしたもので有ます、本人が聞きましたら、暗の恥を明るみへ持出したと腹立かも知れませんが、夫れは胸の狭

いと云ふもの、公の目を以て見ますれば二つの利益が有ます。

● 一つは現在の本人が過去の本人を顧みて將來の本人を警むるので、大きくいへば治に居て亂を忘れぬと一般の戒心なり、二つには貧賤憂苦は何んものやら、夢にだも御存じなき貴婦人令嬢達の御爲に、小さくいへば顛ばぬさきの杖柱ともなれかしと思ふ老婆心であります。

● 私は此二つを自信して何處までも他の嗤笑蹶踏はいたしません、然れば此の女浪人實名何々は大阪某氏の娘にして、町人ながら最と嚴かなる父母の手に成長し、幼少より家業に従事し、傍ら讀書に勉強した者であります、又其の頃は商家等に學問する者の極めて少い世の中でありませぬから、女の本を讀むは無用とか邪魔になるとか言ひ罵る

人口を憚り、夜分人静まりて後か、又は朝早く四隣のまだ起きぬ内に、何か禁令でも犯す様に隠れてしたと申すことであります。

● 風習は奇妙な者であります、是れとは反對にて、此の娘六歳許りの時妙に珠算を置くのを親も珍らしことや思ひけん、折々客の前にて其の業を試むるに大方違ふことなき儘、賞品杯與ふる人もあるにつけ、子供心に嬉しく思ひながら、慰み半分に算盤が何の用に立つといふ譯もしらず、際立て稽古もせず、日用普通の事に止まり、十歳に及ぶころはひ、一步を進めて書物が讀みたいと思ふ心が出来、算盤の方はうすらぎました。

● 元來祖父も父も越高洲先生の弟子にて、市人ながら讀書を好み、家庭の訓義嚴正なりしも、先生の風に興起する所ありてならんと思はれます。

● 先生の嚴正なる一つ二つを茲に擧ぐれば、伊丹の酒造家某の倅先生に従學せし頃、出入の刀屋に注文して立派な大小を拵へさせしかば、倅心中に吾物ならんと思ひ居りしに、左はなくて大切に簞笥に入れて仕舞てある故、不審に思ひましたら、越先生の御腰のもの餘り粗末なる故、新調して差上る積ちやと申ました、其處で倅の當はさつぱり違ひ失望したと聞きました、此の一事でも先生を信仰して大切にされたことは分ります。

● かゝる貧しき先生のこと故、北堂がなくなりました時、葬式の入費に差支へて、幾らかの金が入用と或人に話されしに、其の人早速に持参して用立てしかば、其の數を改めますと、二朱金一ツ不足したので、先生忽ち顔色を變へ、數の足らぬ金を貸すと云ふは有るまじきこと、畢竟誠敬のな

きより右様の不都合も起ると云ふもの、斯る不實の金は母の葬りに用立てがたし、直に持歸られよと、以ての外不機嫌でありました。

○其處で其の人夫に迷惑し、全く疎遠の過ちにて故意になせしことには侍らず、幾重にも容赦を願ふと再三に詫言して、漸うに借つてもらひしと申すことでありますが、金を借るに怒るといふも、詫言して借ってもらふといふも、餘程流義達の御話ながら、先生の嚴格、平生人に信せられて居たことは十分に分ります。

○又母に事へて至孝の人にて、母御の爲に門人の事故、折々鯉の周旋を頼みに、此の娘の許へも自分に見えましたと申すこと、是れも親を鄭重にあらはるゝ一つなるべし。

○それこれの話を客に對して、折々親の吹聴せら

るを傍へ聴して居ました、其の頃流行の手島講釋を時々聴聞せし間に、ふと孟子の無名指僕て不仲の章を引、子供にも分る様に親切に説き聴せらるゝ道話の、ふと耳に入り心に徹し、吾が心の人に如かざるを話せしもの書物を置いて外になしと、一念覺悟したるより讀書の志を起しました。

○初め句讀を膝下に受け、後越の門流奥野小山と云ふ先生の家に通學して未だ二週年も通はざるに、先生の媒酌にて或諸侯の倉邸更某氏の子息某に結婚することゝはなりぬ。

○蓋し結婚の由来を原るに、其の婿たる者儒學に熱心にて、十六七歳の頃より眼疾に罹り、讀書の不自由を感せしより、學才ある婦を娶り、代讀に従事せしめ、己れ眼疾あるにも拘らず、其の宿志を達せんとして、百方望みの人を搜索せし末、女

史に札が落しと云ふ。

○女史も亦家業に執掌して讀書の暇なきに困み、折もあらば良家の婦となり、閑暇無事の地を得て従來の志業を成すにあり、是に至りて意氣暗に投合して夫妻の禮を執りしなり、是れ則ち他日女浪人一條の物語を捻出す第一の原因にして、幸と云はんか不幸と云はんか、塞上の翁に非るよりは判断をしがたかるべし。

○かくて兩三年も立つか立たぬに、天に不思議の風雲あり、人に不思議の變動ありて、初の目的はさらりと外れ、倉邸俄に廢しとなり、負債の督促雲の如く、舅家危急存亡の形勢に立到りました、是れ女浪人第二の原因にして、家を擧げて本國美濃に退去せんか、離散して別に生計を營まんか、方向に迷ひました。

○此の時懇意の人が参りまして、今般皇女和宮

様御東下に就て、一通り文字の心得ある女中三人、御側御右筆に御入用にて、申出る者あらば三百兩に二人扶持下さるゝとのこと、京阪の間に御募りの處二人は已に應じたれども、猶一人不足の由、御嫁御様思召はなきやとの話にて、舅より相談もありました、夫が第一不承知にて、豊三百兩を以て其の婦を賣るものあらんやなど申し張り、其の事休めになりました。

○兎角する程に、一と先歸國の相談に纏まりましたが、夫の朋友中には其の不利を説いて止むる者も有つたなれど、夫は身の失明を氣遣ひしか、將別に思ふ仔細の有つてか、聞入ませいで、退去する際になり婦人に向ひ、事已に斯の如し、去留意に任すといふことでありましたが、婦人は嫁して

は夫に従ふ本文通り隨行に決心しました。

○併し父母の心中推し量れば、娘一人捨たる様に思ひましたらうし、罪なくて遠き島根に流さるゝ様にも思ひましたらうし、果ては書物だに讀ませなんたら、かゝる憂目は見ぬことゝ、愚痴をさへこぼしたも知れませんが、英吉利も亞米利加も隣國の心ちする今の世の中より見れば、可笑くも言甲斐なくも思はれますが、都會より田舎へやるは監獄も同様に思つて居ります此の頃の親心、無理ならぬことで有ります。

○かくて両親に辭し別れて、住みなれし大阪を後にして、見もしらぬ國の境へ浪人の途首せしは辛酉の年の冬のこと有りました、是れが世路の艱難を踏む初歩で、道中大阪にて見たこともなき大雪に出合ひ、ほんまの行路難も粗經歷して本國美濃

に落附きました。

○舊里の家督は田畑もあり山林も有つて、其の邊土塚の敷に入りしも、季弟の所有となりし後、幾度か變故を経て財産舊の如くならぬ、仲弟は他家へ養子となり、家督は相續したれども、小身の家來奉祿に富むといふ身分にあらねば、學問の時世の口には大風呂敷をひろげても、渡世には迂闊な者許りでした。

○して是ぞと申す考へもこれなく、先づ協議の上、或チト許りの市街に村學先生の店を開き、一年餘りも教授の眞似事を試みたれども、業の行はるゝと云ふ見込もなく、退いて舊里に同居し爲す事もなく、過す内眞は急病發し西京にて身まかられ、愁の涙未だ乾かずに親里より迎ひ來り、父重病の由を聞き、喪中ながら旅装を調へ、久し振にて故

郷に省し、看護をなすこと三箇月、終に不起の愁に丁り、喪終へて再び美濃に歸りたれど、國事多難の世の中故、往復も中々容易では有りませなんだ。

○此の後は勢ひ益々切迫して、尊王攘夷の説田舎迄波及して、脱藩人有志の徒西より東より二弟の間に來往して、夫は顧問の員に備り、朝暮耳にする所、忠孝の談文武の教ならざるはなく、時々愉快の圓居に侍りて、殆ど辛苦艱難の身にあるを忘れましたが、二弟の家産は是れが爲に彌其の缺乏を告げ、純然たる浪人境界に落魄し詫て、よにふるやの軒の繩すだれと迄には參らねども、朽ちはつる迄かゝるべしやはの意氣込にて、あちこち奔走の勞をこりました。

○婦人は其の中に在りて老衰の始を慰め、失明の

夫に仕へて、入つては讀書に従事し、出でゝは自ら薪水の勞を取り、泉を山下に汲みては肩に擔ひ、桶の重きを忘れ、米を民舎に舂つきては、布袋を數町の外に背負ひ、殆ど身は都會人たるを忘失せる者の如し。

○此の間一男一女を擧げて學育の勞も亦多きに居る、季弟終に故國を辭し僅に餘すの財産を分ち東濃に流寓す、夫は暫く留守して墓田の守となりましたが、已むを得ざる事情ありて、尾州の親族の招きに應じ、家を携へて移り住むことゝは成りました。

○美濃に在ること足掛六年で有ります、尾州に移りまして後も目的はさらりと違ひ、親族の家に客寓して、居候の味も嘗め盡した末、周旋するものありて一の宮といふ市街に出て僑居を致しまし

たが、此の交小聊かの儲蓄に紛紜を生じ、言ふべからざるの困難に陥り、衣類を賣りて丸裸となり、僅に生計を立てることに成りました。

○其の紛紜に就て兩三人深切に世話する者が有りまして、意外の抄取りとなり、不幸中の幸で有りまして、在阪の昔に較れば月と幣の境界ながら、左りとて飢ゑも凍えもせず、分相應に樂しき月日を送る中、大阪より飛報到着、母の大病と聞き、取物も取り敢ず一の宮を發して、夫婦宛も西國順禮の出立にて、歸郷の途に上りました。

○其の道中米原の泊りにて、若州小濱の周旋方と同宿し、圖らず名乗り合つた奇談もあります、元此の人は義濃の産にて直接に物言ひかはしたことはなけれど、弟と其の人とは知る人にて、間接に姓名は聞知りたる者なるが、御互に風體の懸隔し

だので、一向に心附かず、初めは順禮相應の會釋をいたしました。

○後宿帳を認むるに及び、其の人なるを知覺して、慇懃に前の無禮を謝し、乗船の際夫の介抱して大に力を添へられ、船中耕雲齋の話など出で頗る寂寥を感し、大津に着船の節も同様旗亭に就て離杯を酌み、京師と大阪とに別れました。

○夫れより伏見へ参る迄の路次泥濘にて、失明人には歩るかれませんか、負ぶつた所も有りますが、駕籠なれば兎角はありませぬ、此の頃の風には、道中にて駕籠に乗れば雲助に酒手をねだられ、仕方のないもので有りまして面倒が掛ります故、仕方なしの雪助替り、下部は一人連れまされたれど、小兒を負うて居る故間に合ひません。

○伏見へ着いた頃は眞暗がり、下部は一足先へ船離して亡母に預けて置ましたのを連れ歸りました、雇ひの下部共道中五人にて美濃地へ返り、再び一の宮へ立戻りましたは丁度暑中、旅疲れも一入にて、夫なごは十日許りも寝て許り暮しました。

○一の宮を立つたのは春の半ば故、餘り逗留の長きより歸らぬことと推量して、今迄の住家は人に貸す約束が出来、明け呉れよとのことにて、同じ郷の須ヶ崎と云ふ所へ、小やかなる民舎を借り移り住みました。

○こゝは市街を引離れて葛西然たる一村、俗中の俗なれども、隣家に淺井といふ豪農ありて心安くしました故、入浴杯の差支もなく、不自由の様な自由を得、『籬邊花盡田家暮、細借蛙聲說寂寥』といふ實況は、茲に居て其の味ひを知りました。

宿へ遣りましたから、男女二人手を引いて往來を通るのも何やら變なもの、別して伏見一亂の後で有りますから、餘計の心配をして宿に着き、船に乗るさいふ所にて雇ひの下部を返し、船中は親子三人にて曉方八軒家に入り、無事に親元へ着きました、随分風替りの旅行、生れてから初めて有りました。

○病人も大悦にて手を取て泣きました、夫から後は看病に暇なく種々手を盡くしましたなれど、終に其の効なく程経て永き訣れとなりまして、遺憾は限りなれど、遠方に引別れた者が、十分に看とりして終焉に逢ひしはまだじもの仕合として、葬りのこと後のこと何くれと營み果て、思ひの外長逗留となり、大阪を立ましたは六月一日。

○此の時一の宮へ出ました初に、六歳の男子を手

ました、一の宮より少し隔たりたる刈安賀と云ふ在所に、關戸といふ、書物は讀めぬと書畫に富み、風流好事の豪農が有りまして、此の夫妻の事を聞き新宅の明家を貸し、子弟の爲に教育を頼み度との申込が有りまして、是迄懇意にした者の勤めに、其の方へ引移りました。

●是れより村學先生の稱號を辱うし、行々は盛大に成りさうな景況にて、禮遇も手厚く、家作も手廣く、俗務を抛ちて讀み書の外他事なく、先づ安心と思ひの外、蕪蘭繁らんと欲すれば秋風之を傷るの譬へに洩れず、關とはいへぬ藪柑子にも、矢張秋風が立ちそめて、禮遇も次第に薄らぎ、家作も入用の事が出来たとの口實にて退去することに成りました、是れには入組たる事状もあれど、言は猿が結句まじならん。

●倍女子を一人生んだ計りが、刈安賀の儲け物で有りました住馴れし一の宮に歸り、明神の片邊りなる左もいふせき明家を借り、人の嘲笑に顧着せず、醜態として暮す中、名古屋へ出る手筈が出来、推舉する人ありて、女學校の教員に商賈替となりました。

●此の間が女浪人流落の沸騰點に達したといふ所で、其の要點を擧ぐれば、或は膝を環堵の室に容れて親戚朋友の疎なるを厭はず、或は隣を富貴の家に卜して蒼頭立脚の業を甘んじ、賃白に名高き孟光が徳はなれども、烟物を道路に荷ふ力だけは似かよひて、人に笑はれしこともあり、爐に當つて客を引く文君が美は非ざれども、市店に立つて物を商ふ厚皮ありて、片はら痛く思はれしこともあり。

●裁縫に夜を更しては仕立屋の手間取を學び、閑を偷んで見臺に向へば醫者の玄關番に髣髴たり、外に出し度毎に乳香子を夫に託して急用の飛報に接し、病夫の湯薬に侍して句讀の代理に忙しき杯、辛苦といふ辛苦、勞力と云ふ勞力は、大方に經歷して、負債の山に分け登らぬ許りが、一つの手柄なりけらし。

●名古屋へ出たる後は、清水某と云ふ學校掛りの奇男子が有りまして、其の者の周旋にて暫くは其の家に寓し、四疊半一間の二階に家内五人起臥をして、客もしたり學校へ通勤もして居りました。●漸々六句と云ふ市街に移り住み、井戸の鮒が溜池に放された心持で有りました、初は幅下の女學校に通ひ、後養成教師範科を卒業して、上町の桃天學校故の明倫堂へ轉じまして勤め、不圖した因

縁より愛知師範學校長の薦にて、東京女子師範學校の教員に召出さるゝ手順となり、愛知學務科へ其の沙汰は有りました。●併し養成の卒業生は同縣に奉職の義務を負へる年限内にて、本人へは申し聞かせず、直に謝絶しましたので、事水泡に歸せんこそせしを、同縣英語學校長に知る人ありて、深切に周旋の勞を執られましたので、東京の方も愛知の方も程よくまごまごり、彌東上の望みを果す好結果を得ました。●併此の紛紜には餘程の時日を費し、随分難儀の談判で有りました、是れが女浪人の足洗ひともいふべき終局、愛知三年の浪境は前數年の比に非ず、否より泰に入る初歩とでもいふべき時期で有ります。●夫れより懇親の人々に別意を表し、方々に謝意

を陳べ、六句の宅をかしまだちして、道を一の宮
に取り、美濃地を経て大阪へ通り、小女を妹に託
し置き、神戸より乗船して東京へ着ましたは。明
治八年の十一月十三日で有りました。

○若早々土地不案内にて人力車夫に欺かれた奇談
も有りますが、是は田舎者には珍らしくもないこと
として、師範學校奉職の後も色々變化し、或は
華族の令嬢を私宅に預り、或は學習院に出仕して、
三田より徒歩して通ひし等、御話は澤山なれど、
在京のことは御存知の御方も有ますれば、此の度
は略しまして御預りと致しませう。

○抑も最初の目的遠く申すは、志した學問の方に
は十分力を入れることが出来ませいで、思ひ掛け
ぬ世路の艱難を踏み、普通一般の俗務にからまれ
生涯を果すので有ます、書物が表道具に成て居り

ますから、書物を讀んだ仲間入はして居るものと、
實際本を讀む隙のないので、不學に相違は有りま
せんが、家事經濟とか、宦前の取締りとかいふ側
の片端は、知らず／＼稽古が積み、御蔭で並の家
内、御神さんになられました。

○此の點は左のみ悔しいと思ひませんが、夫の
望み通り専ら代讀に従事し、夫の業成るときは吾
志も従つて成り、不知不識の間に一舉兩得の順
境は、一朝相反して内外位置を易ゆるの逆境とな
り、男が蔭の舞をなし、女が表役を勤め、前にも
申した通り、少しも進歩のない學問を間に合せに
使ふと云ふは、終身の遺憾で有ます。

○なれども未熟の學問が渡世の資と成りました
は、隠然として一敵國ではない、一大江山が有る
故で、自分の功では有ませんが、何處迄も變せぬ

といふ忍耐力だけは、全く自力かど自信して居ま
す。

○今を以て過去を觀察しますと、よく辛抱したと
思ふものゝ、其の時に臨み其の場に當りては、又
考への變つたもので、苦中にも樂あり、難中にも
易あり、外に待つことはいないもので有ります、去
りながら纖弱き女の身で、失明の夫に傅き、幼少
の子供を抱へて、所々方々を漂泊し、東京に落着
迄左して侮慢もうけず、身に汚辱も蒙らず、無難
に經過しましたは、天助天幸で有りませう。

○只世の變遷は誰とても逃れぬもの、其の變に處
して、忍耐力は誰もなくはならぬものと云ふこ
とは、修身學に取り必用と存じます故、演説の責
ふらぎに皆々様の御耳を借りましたことと有りま
す、詰まらぬ御じやへりに貴重の時間を費しまし

た、嘸御退屈様。

(完)

畫傳餘錄終

跋

物を空中より落す、重きものは風を起し、疾きものは光を發す、地に落ちて憂然聲あり。人も猶物の如し、古より流れて今日に至る、其の面積、其の重力に従ひ、或は風を起し、光を發し、聲を成す。其の物地上に留まりて力を失ふか、曰く否、飽くまで抵抗して物體と戦ふ、其の重力は則ち其れ。人死するも、生きるも、其の勢力は無盡なり。今畫傳子之を捉へて、縦より横より、上より下より、擒放自在、把玩翫揚、或は風を起さしめ、光を發せしめ、聲を成さしむ。讀者の之を讀み、之を見るもの、隨處其の所得に任す。今復之を一冊子となす、再び物を空中より落すもの、請ふ力學の原則に従ひ、之を讀め。

明治四十年七月初一

素川 鈞 徒

明治四十年七月十七日印刷
明治四十年七月二十日發行

○定價金四拾錢
▽郵税金六錢

不許
複製

編輯者 畫傳子

發行者 田中源三郎

印刷者 金澤求也

印刷所 東京印刷株式會社

發行所

東京市麴町區
有樂町三丁目一番地

有樂社

(電話本局 貳〇九五)
(振替貯金 三六〇)

●有樂社發行著名書籍目錄

◎英譯書類

第二高等學校教授デニング譯

英繪本太閤記

四六版 全一冊
定價 金壹圓
小包料 拾錢

太閤秀吉は日本第一の豪傑にして太閤記は日本第一の面白き傳記なり此面白き太閤記は本邦第一流の英文家デニング教授の才筆にて譯されたり行文平易明快、中學程度の學生には真に手頃の讀物にして讀み懸くれば讀み終らざるに掛けぬ珍書也。

元東京毎日新聞記者 木下 尚江 著
東京帝國大學文科大學講師 アイサーロイド博士譯

英良人の自白

四六版 全三冊 洋裝美本
定價 一巻六拾錢 郵稅四錢
二巻七拾錢 郵稅四錢
三巻 未 刊

辯護士として、新聞記者として、社會主義者として、演説家として顯著なる經歷を有する木下氏の小説良人の自白、は非常なる喝采を世間に博せり、蓋し尋常小説家の企て及ぶべからざる材料と著想を有するによる、此英譯亦ロイド氏の勢になつて廣く歐米讀書界に紹介せられんとす、英學者必需の書たり。

故尾崎紅葉山人著 春陽堂藏版
東京帝國大學文科大學講師 アイサーロイド博士譯

英金色夜叉

四六版 全三冊 洋裝美本
定價 一巻上製七拾錢
二巻並製六拾錢
三巻並製未 刊

金色夜叉は故紅葉山人最終の傑作にして、日本近世文學の最大産物なり、今や其英譯、在留外人中第一の名文家を以て見らるるロイド氏夫妻の才筆に成る今更贅言を要せず。

徳富蘆花著
鹽谷 榮譯

英不如歸

四六版 全一冊
洋裝美本
定價 金六拾錢 郵稅六錢

不如歸の好評なるは言ふまでもなし儘に明治文壇第一流の好著にして既に七十餘版を重ねたり、其英譯亦海の内外に愛讀せられ將に六版を重ねんとす。

村井 弦 著
吉田 榮 右 譯

英紀文大盡

四六版 全一冊
定價 金五拾錢
郵稅 金四錢

紀文大盡は即ち紀ノ國屋文左衛門が事、紀州に生れ、饒敏小僧より身を起して忽ち一大商王となる、氣宇宏壯才氣活潑蓋し日本が曾て産出せる快男兒中の最快なるものなり、譯文平易にして明快海國青年の必讀書たり。

伯耆大隈重信君序文 國民新聞主筆徳富猪一郎君序文
東京市長尾崎行雄君序文 米國スター博士著
英文 日本魂
定價金壹圓小包料金拾錢
アール・ペーパー印刷密書二
十餘枚
上等クロース表装類本

著者スター博士は米國太平洋岸に於ける五萬有餘の我同胞が師父
として尊崇愛慕する日本一の大恩人也、我國人にして彼地に渡航せ
るもの學生といはず、労働者といはず、其恩顧を蒙らざるもの稀な
り、我國現今朝野の名士にして博士が好意と指導の下に勉學成功せ
し者最少にあらず、博士の昨春我國に來遊するや政府亦其功勞を多
とし以つて勳五等に叙せり博士日本の風俗人情に精通し深く其真髓
に入る、即ち其餘技なる特筆を揮つて此詩集を作る。
收むる所の詩篇無慮七十有餘、西人の眼に映する日本魂果して如何
なるものぞ英文を能くするもの一讀巻を措く能はざるものあらむ、
巻末細註の附録あり、初學者亦依つて以て熟讀玩味するを得べし。

英學界編輯局編纂

英官職名集

定價金拾錢
郵税金貳錢
本書は其名の如く、あらゆる官衙名あらゆる職員名を英譯せしに至珍
至便のもの也。

内村達三郎譯註

註失樂園

四六版一八〇頁
定價金壹拾五錢
郵税金四錢
品切れ

◎ 에스ペラント研究書類

第四高等學校講師 ガントレット共著
學務院教授 丸山順太郎共著
世界語
定價 金壹拾五錢
郵税金 四錢

本書は主として文法を説明せり正確にして丁寧なるは本邦 에스ペラ
ントの開山とも云ふべきガントレット氏の著なれば今更贅する迄も
なし

文學博士黒板勝美 哲學博士淺田榮次 安孫子貞次郎共編
エスペラント日本語辭書
定價 金五拾錢
郵税金 四錢

エスペラント研究者の必ず座右に備へざるべからざるもの也
エヌメラント研究者の必ず座右に備へざるべからざるもの也
エヌメラント テキストブック
定價 金壹圓
郵税金 四錢

エヌメラント 辭書
定價 金壹圓
郵税金 四錢

エヌメラント 辭書
定價 金壹圓
郵税金 四錢

右三書外圍にて出版せられしものを取寄せエヌメラント研究者の爲
に頒つもの也。

エヌメラント發明者ザメンホフ博士著
EKENCARO
定價 一部郵稅共拾貳錢
十部同 九拾錢
五十部同 四圓

右はエヌメラント講習會用教科書として出版せしもの隨時所望の方
に頒つ。

◎ 雜書

瀨戸内海

山東 塚越芳太郎先生著
四六版二二〇頁全一冊
定價 金參拾錢
郵税金 四錢

東京朝日新聞論說集

定價 一冊金貳拾五錢
郵税金 四錢
十一月分既刊
兩朝日新聞の論說は常に問題の首領に中り、能く根を抉し髓を刺すの
妙、拍案驚する能はざるものあり、編者は平生愛讀の餘、同好の士
もあらんかと思ひ乃ち本社に請ふて殊に之を編纂刊行し以て再讀の
便宜を與ふるのみ。

心身健康談

四六版全一冊一六〇頁
定價 金貳拾錢
郵税金 四錢
故根本通明 原田玄龍 石塚左三先生談話
人間は萬事をさしおきて先づ心身の健康を計らざるべからず何とな
れば富貴高名悉く心身の健康より産出せられたるものと知らずや本
書は前記三先生の實驗談にして悉く採て以て服膺すべし。

小川煙村君

現在的活動主義

菊版一冊一五〇頁
定價 金壹拾五錢
郵税金 四錢
過去を悔む勿れ未來を夢みる勿れ現在の活動は未來の良果を結ぶ本
書現在の活動主義を福音を説いて刺す處なし。

新野崎村

袖珍 珍美本
定價 金貳拾五錢
郵税金 四錢
是れ朝新聞紙上江湖の喝采を博したる新講話「新野崎村」「縁切渡」
「元祿武士」の三篇を集めて一冊となせるもの、殊に「新野崎村」は全
篇の三分の二を占むる長篇にして、事件の變化、脚色の奇抜、行文
の平易流暢、最も著者苦心の痕を見る、
而も著者の抱負は、寧ろ所謂新講話を起さんとするにあり、若夫れ
此等の新講話が、最も通俗にして健全なる平民的娛樂文學として、
如何なる奇席にも如何なる家庭にも、讀まれ話さるもの期も近きに
あらんか。敢て江湖の諸彦に薦む。

開運秘訣

和裝美本 全二冊
定價 金貳拾錢
郵税金 四錢
高い本です、併しよい本です。玄關的の山の秘訣ではありません。
易理を基礎とした心的修養、體的攝養を遺憾なく説き盡し、實例例
話が面白く挿入してあります。若し少しく文字ある人之を讀まば、
其根を及し其髓を刺すこと痛快極りなく、必ず胸中の停滞は立ごと
ろに一掃され、開運の由て起る處が明快に分ります。

時代女學叢書

一、二、三卷
定價 各金卅五錢郵稅各六錢
三冊金壹圓郵稅拾五錢

出版界空前の美本

◎新刊七月一日發行 一月七刊新◎

避暑旅行

用靴に入れて置かれなば細君が
心盡しの程も察せられて床かじ



この本を讀まぬ前の人

和田卍子著

新西洋笑府

北澤樂天畫



この本を讀んだ後の人

西洋種の最も面白き一口噺集和
卍子氏の輕妙なる筆に如何なる理
屈臭き紳士も讀んで必ず吹出さす
に居られぬ本なり、加ふるに畫は
北澤樂天氏獨特の筆になり精巧な
る石版、コロタイプ版、木版網版等
大小七十餘箇を挿入し本文と相俟
つて妙言ふべからず

季節進物

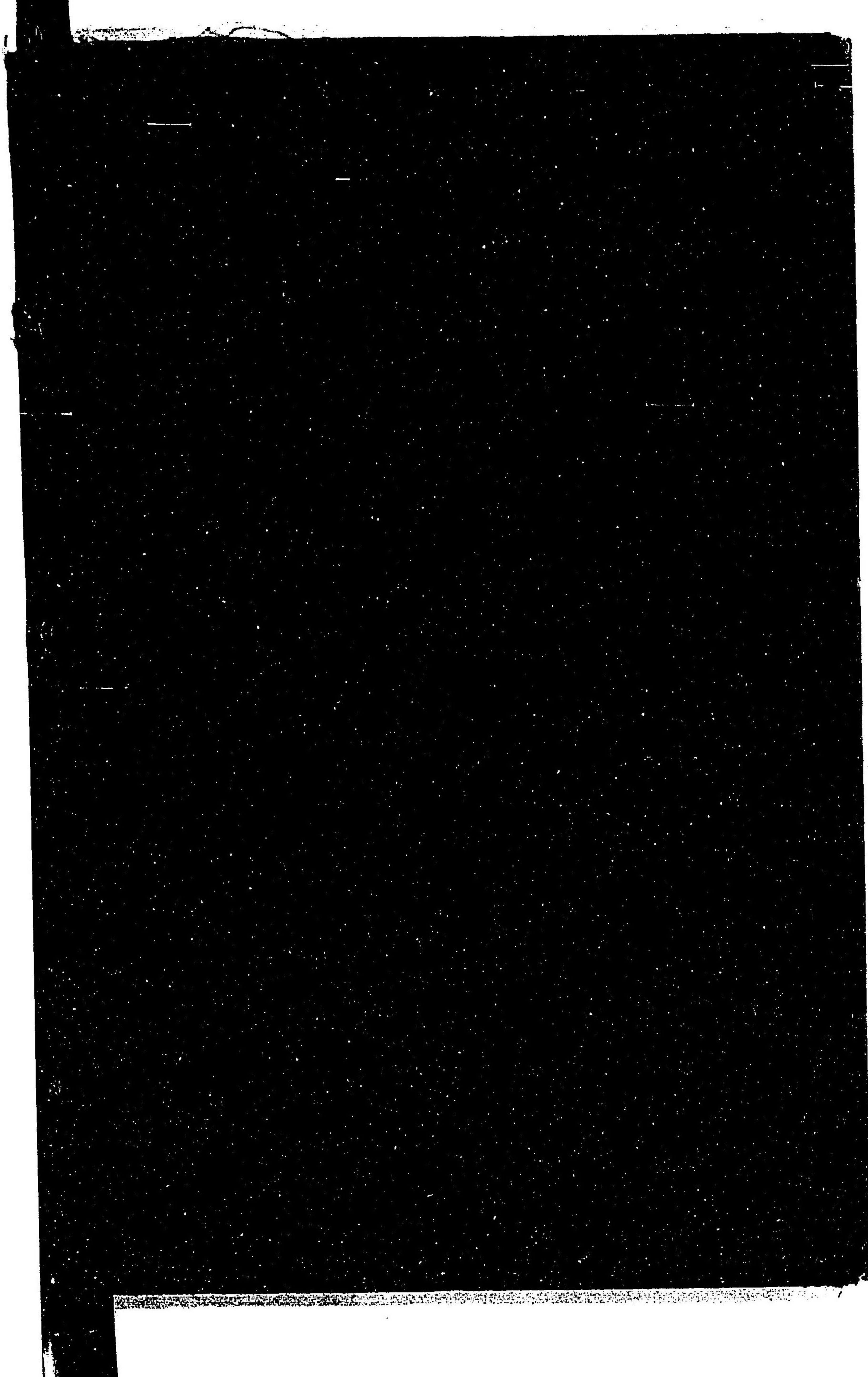
として贈れば受けて樂のじむ人
は先方の主人令闈初め家族一同

定價壹圓郵稅八錢

東京樂有社發行

電話本局二〇九五 振替口座三六〇番

76
344



76
244

004599-000-9

76-244

人物画伝

大阪朝日新聞社/編

M40

ACE-1200



